

## 橘 樸

### ——アジア主義の彷徨——

野村 浩一

- 一 まえがき
- 二 問題の所在——橘と中国——
- 三 中国研究への出発——民衆世界からの視座
- 四 「中国社会論」から「中国革命論」へ
- 五 「国民革命」の動態分析——その昂揚と帰結——
- 六 「国民革命」の衝迫
- 七 「方向転換」——アジア主義への屈折——
- 八 「日中戦争論」——その光と陰——
- 九 むすびにかえて——アジア主義の彷徨と終焉——

### 一 まえがき

橘 たちばな

樸 しらき (一八八一—一九四五)

明治末年から大正・昭和にかけて、その生涯の大半を大陸に過した、在野のジャーナリスト、中国研究者、そして思想家として著名である。

彼が「遼東新報」入社のために初めて大連に渡ったのが一九〇六年（明治三十九年）——爾来、中国各地に様々な活動の足跡を残しつつ、混乱のさなかの「奉天」で客死するのが、日本敗戦の年（一九四五年）十月のことであるから、まことに橘は、ほぼ半世紀近くを激動の中国に送ったことになる。その意味では、橘は、大陸における「日本帝国」の興亡の歴史を、まさしく同時代人として生きぬいた人物の一人だったといっていだろうか。あるいはまた、明治の初頭から八・一五に至るまで、日中間を舞台に活躍した数多くの群像の中で、文字どおりその最終ランナーであったともいっていだろう。橘の描いた思想と行動の軌跡は、近代日本の日中関係史の中で、歴史を織りなす無数の糸の中に、おそらくはユニークないろどりをそえて存在している。

これまで橘は、ほぼ三つの側面において取り上げられ、また問題とされてきた。

その一つは、中国の思想、社会の研究者としての橘である。『支那思想研究』（日本評論社、昭和十一年）、『支那社会研究』（日本評論社、昭和十一年）、『中国革命史論』（日本評論社、昭和二五年）がその主要な成果であり、その分析は現在においてもなお、検討に価するものをもっている。

第二は、「満州事変」（一九三二）勃発に際して、彼が自覚的に遂行した「方向転換」をめぐる諸問題である。

橘は、この歴史の転換点に立って「自由主義と資本家民主主義とに訣別」することを宣言し、「新たに勤労者民主主義」とくに「満州建国のための農民民主主義」への道を選択した。それはたしかに昭和思想史上の一箇の「転向」問題であった。

第三に、日中戦争時代を通じての「翼賛運動」への参画、その「国家主義者」ないし「超国家主義者」と目される側面である。「国体論序説」（『中央公論』昭和十六年七月）を代表とする『職域奉公論』（日本評論社、昭和十七年）がその思想的結晶物である。

これらの諸側面の検討は、いずれもなお重要な課題たるを失わず、逆にまた、こうした問題の存在自体が、橘という人物のもつ多面性、多様性を照射しているといっている。

しかし、橘のこのような諸側面を一つに結びつけるものは、何であったのだろうか。すでにその経歴からも十分に明白であるように、それは疑いもなく中国であった。あるいは橘にとっての中国のもつ意味であった。さらにはまた、より基本的には、近代日本において日中という関係性のもつ史的構造であった。それこそが、時として橘を最もリアルな観察者たらしめ、また、時としてはきわめて熱情的な工作者たらしめたのであり、そして究極的には、日中関係というこの磁場が、あたかも万力の如く彼をギリギリとしめあげていたのである。

むろん、近代日本にとって、およそ中国問題とは、すべての人々のうえにひとしく蔽いかぶさっていたほとんど運命的な問題である。いまさらくり返すまでもなく、そこから「脱亜入欧」論が生まれ、また「アジア主義」が生み出された。中国問題は、近代日本の現実と理念、インタレストとイデーが陰に陽に交錯し、せめぎ合う場であり、同時にまたその葛藤がただちに日本へとはね返ってくる場でもあった。政治から経済、社会、文化、思想に至るまで、近代日本はこの衝迫を決してまぬかれえなかったといっている。

橘樸は、とりわけ昭和期において、この中国からのインパクトを最も自覚的に取上げ、吸収し、昇華しようと試みた人物である。いや、日露戦争の翌年から日本の敗戦の日までという時期をとれば、彼の思想と行動の変遷の中には、明治、大正、昭和を通じての中国問題の在りようが、その一身に凝縮されつつ示し出されていたといっているかも知れない。橘の描いた軌跡は、おそらくこうした意味合いでの中国問題という視点から照射することを通じて、その深い位置づけが可能となるだろう。

私はここでは、橘の生涯を必ずしも伝記的に辿ろうとする意図はもっていない。あるいはまた、彼の思想の曲

折をできる限り斉合的にとらえようとすることを第一義的な課題ともしていない。むしろその主たる関心は、橘というユニークな個性を通じての、中国問題の在りようの解明にあり、また近代における日中関係の構造についてのなにがしかの考察にある。そして、そうした史的究明は、同時にまた、日本にとって、中国さらには広くアジアのもつ意味を、より一般的な場において再度見直していくための一つの手がかりをも与えることになるだろう。その生涯を鳥瞰することから始めつつ、順次、課題への接近を試みることにしよう。

※ 橘については、山本秀夫『橘樸』（中央公論社、一九七七）が公刊されて、はじめてそのかなり詳細な伝記が知られるようになった。その他、彼のかかわった『支那研究資料』、『月刊支那研究』、『満州評論』（続刊中——いずれも龍溪書舎）なども覆刻されて、基礎的な資料が刊行されつつある。橘個人についていえば、山本の労作は最も基礎的な資料を提供し、すべての出発点となるべきものである。本稿もまたその伝記的部分については、多くをこの著書に負っている。

※ 地名については、当時の歴史的状況ないし感覚を鮮明にするために、その時点での呼称を使用することがある。

また、原文の引用に際し、便宜上、場合により略字を使用した。あらかじめお断りしておきたい。

## 二 問題の所在——橘と中国——

橘の生涯にわたる活動は、さきにふれた、その行動の軌跡のもつ三つの側面にある程度照応して、ほぼ三期に区分することができるように思われる。

第一期は、中国に渡り、ほどなく辛亥革命に遭遇し、やがて中国社会研究に沈潜して独自の中国論を打出しつつ、「五四」から「北伐」——「国民革命」の激浪をへて、「満州事変」（一九三二）を迎えるまでの時期である。

第二期は、「満州事変」に際しての「方向転換」以来、満州国協和会の理論的リーダーの一人として活躍し、

同時にいわゆる『満州評論』派を形成して、建国の渦中で活動する時期である。

第三期は、日中全面戦争の開始から敗戦、その死に至るまで——この間、日中間を往来しつつ、一方で日本国内の改造、他方で日中戦争打開の方策を求めて、評論、實際両面にわたる最後の活動を展開する時期である。

橘において、この画期はかなり鋭角的であり、かつ具体的である。彼は、後年、このそれぞれの転機について、いくつかの言葉を残している。

(一) 渡華以来、「支那研究の……最も興味深い題目はその政治現象に外ならぬと信じ」て、いわば中国の政治をひたすらジャーナリスティックに注視していた橘は、民国五年（一九一六）、袁世凱没後の頃からこうしたみかたに対するある種の懷疑とより深いアプローチの必要性を感得するに至る。「支那の伝統政治は支那に特有な社会組織の上に行はれて居るものであり、而して此の如き社会組織からは必然に此の如き政治が発生する……従って支那の政治を鑄直す為には其社会組織を改造してかかる外無いのだ」。「此の『政治』を根抵から踏みつぶしてふことこそ支那の改造の根本要件である」。「記者（橘）が支那なる偉大な生物の生命に触れ得たと感じたのは実に此の認識に到達した以後のことである」。こうして橘の「理智的興味」は、その後「殆ど全く政治現象から離れて社会現象の一途に傾い」ていく（『月刊支那研究』一卷一号、「時評数則」一六一、一五八頁、龍溪書舎）。ここには、彼の研究の転機が、きわめて明瞭に示されているといっていだらう。『支那研究資料』（一九一七—一八、全十冊）『月刊支那研究』（一九二四—二五、通巻十号）に代表されるような最も基礎的な中国社会、思想研究への沈潜が始まり、そのユニークな中国認識が形成される。と同時に、中国の社会組織の改造という巨大な歴史的課題が浮上し、その研究に焼きつけられる。

(二) それから十数年後、彼は、第二の画期に際して、「満州事変と私の方向転換」という有名な一文を書いて

いる。

「満州事変は私に方向転換の機会を与えた」。「私は自由主義者であった。それと同時に、私は自由主義の母胎たる資本主義を否定する志向に強く支配されて居た」。「東拓棲上の感慨（板垣征四郎、石原莞爾らとの会談を指す）は、実に斯くの如く脆弱な自身の立場に対する反省の機会を私に与へた。……即ち将校団（満州事変を画策、実行した板垣、石原など関東軍将校を指す）の現在の指導精神とは其の基調を異にするが、併し或る地点までの頼もしい同行者として、この新勢力に期待するところ頗る深いものがある」（『満州評論』七卷六号、一九三四年八月、『橘樸著作集』第二卷、勁草書房、一七一―一九頁）。この言葉の意味するところについてつけ加えることは、ほとんどあるまい。「友人の多くはこれを……右傾と解釈し」、これに「反対する何等の理由もないのであるが、私自身としてはこの方向転換を、私の思想の一步前進……と解し、同時に私の社会観に一つの安定を与へたものだと解して居る」というのが、橘の断乎たる言明である。このコースの意識的切りかえは、あまりにも明瞭といっている。

（三）しかし「王導楽土建設」と銘うたれた「満州国」建国が、究極のところ中国本土侵略への足がかりにすぎず、一九三七年、蘆溝橋事件から日中全面戦争が展開した頃、橘は、第三の転機を迎える。彼はその頃、田中武夫に次のように語っている。「オレは間抜けていた、オレは日中両民族の正しい関係のあり方を念じて、その理論と方法を考究してやまなかったはずなのに、客体の側の中国のあり方ばかりに目を注ぎ、肝心の主体の側の諸条件を顧慮することは浅かったではないか、これはなんということだ、そんなことで関係の設定ができるか、オレは出直さねばならぬ」（田中武夫「朴庵先生と『満州評論』の歴史」、『橘——橘樸を考える会』機関誌——九号、一九七七年一月、四五―六頁。厳密にはこれは田中による談話であり、橘の言葉そのものとはいえないが、『満州評論』の刊行など

一貫して行動を共にしていた門下生の実話としてここに引用する。一九三九年（昭和十四年）、彼はこの言葉を残して日本へと帰国し、以後約四年間、その活動の場を国内に移して、あるいは「昭和研究会」への参加、あるいは「東亜聯盟」での講演、「対支政策」の提言などに全精力を傾注する。再び中国へと戻るのは、四三年のことである。辛亥革命から、「二十一カ条」要求（一九一五）、「張作霖爆殺」（一九二八）、「満州事変」、「日支事変」へとつづく巨大な歴史の流れの中でみるならば、橘の行動の軌跡は、もとよりこの大きなうねりの中にある。その中で彼は自らの画期を刻みつけている。いや、みかたによっては、彼の活動はむしろきわめて正確に、その時代の転期に対応し、それに応じて路線を切りかえていったといっているのかもしれない。彼の転換が意識的、自覚的であればあるほど、この三つの転機はあざやかな区切りを示して浮び上ってくる。

「往々支那学者と誤解されるが、私の本領は終始一貫、支那社会を対象とする評論家たることにある」というのが、後年、橘の己れに与えた自己規定であった。しかもその「評論の動機は物好きや知的欲求にあるのではなく、主として政治目的即ち日支両民族の正しい関係の理論及び方法を探索すること」にあった。しかし「満州事変後……特に支那事変に入り」、評論家たる橘は「好むと否とに論なく、最早従来のやうな傍觀者の立場を棄てねばならなくなる」（『職域奉公論』序説、二頁）。まことに橘はある一定の政治目的をひめた「評論家」から、次いで工作者、活動者へと大きく弧を描きつつ、「満州事変」「支那事変」を転期とするくつきりとした輪郭をもった三つの時期を生きたということができよう。

だが、橘のこうした現実的な諸活動、そしてまた彼自身の意識的な進路の切りかえにもかかわらず、もし私たちがより深く歴史の深層へと目を移していくならば、実は、彼の生涯は、中国の巨大な政治・社会運動、それを分水嶺とするただ二つの時期に区切られていたように私には思われる。その運動とは一九二〇年代後半、中国を

ゆるがせ世界を震撼させた「国民革命」の進展（一九二六―二七）であり、そして、橘に即していえば、その展開に対する彼の認識、把握の在りようであった。いわばそれこそが、橘の行動を本当の意味で決定していたものではなかったか。もとより橘の転換、その自覚的な選択は、彼において、何ものにもかえがたい真実である。それに対して疑問の余地は到底ありえない。しかし、北伐―国民革命というこの巨大な政治的、社会的動態に対する橘の視座構造こそは、逆に彼のその後の生涯に決定的な影響を及ぼしていたのではあるまいか。そこには、まさしく日々、現実を生起するいわゆる「中国問題」がたとえようもない重さをもって横たわっており、そしてすぐれて政治的な「評論家」を志した橘との間に、はげしい火花を散らしていたといっている。

こうした観点から眺める時、私には橘の提示する様々の問題点は、この重要なピークを中心に、そこへと問題が収斂し、またそこから課題が流出するプロセスを探ることによってはじめて明らかになるように思われる。ここには、約二〇年に及ぶ、彼のユニークな中国観形成の時代という前史、そして「中国問題」が異様な曲折を経て「日本問題」へと転化していく後史という二つの時期が存在しているといっている。

もとより歴史とは、個人史においてもまた、一面では、きわめて連続的なプロセスである。様々に生起する諸問題に対するときどきの対応の過程を通じてのみ、その人の一つの軌跡が決定されて行く。この意味においては分水嶺もまた、究極的にはより広い裾野を前提としてのみ成立するだろう。「中国問題」の所在という基本的な視角を軸にすえながらも、しかしできる限り橘という個性の足跡に忠実に、以下、時代を追って問題を取り上げよう。



### 三 中国研究への出発——民衆世界からの視座

橘の生涯の前半は、まことにジャーナリスト、評論家としての生活をもってつらぬかれている。『遼東新報』『日華公論』『京津日々新聞』『済南日報』と——、彼は大陸に渡って以来、大連、北京、済南など各地に居を移しつつ、約二〇年間をもっぱら新聞、雑誌に携わりながら歳月を過している（一九〇六—二五）。橘が満鉄本社調査課の嘱託となるのは一九二五年（大正十四年）十月のことである。彼はまた、この間、自らの創刊にかかる研究誌をも二度にわたって刊行する。すなわち『支那研究資料』（一九二七—一八、十冊）及び『月刊支那研究』（一九二四—二五、通巻十号）。むろん、外地での邦人向けの雑誌、新聞であつてみれば、ジャーナリズムとはいふものの社員若干名というきわめて牧歌的なものであつたにはちがいない。最も初期に属する『遼東新報』『日華公論』時代（——ほぼ辛亥革命頃までに当る）の文章は全く残されていないので、その内容はいまのところ知るすべもないが、少くともこうした経歴は、彼がその生涯を「支那問題」のジャーナリストとして捧げようとしたという言葉の真实性をたしかに裏づけているといつていい。

しかし、すでに先述したように、橘がきわめて自覚的に己れの進路を構築しようとするのは、袁世凱没後のほぼ一九一六年（民国五年）、そしてその立場を、ほとんど堰を切ったように鮮明に打出していくのは、おおよそ一九二四年（大正十三年）、『月刊支那研究』の創刊に始まっている。そこには「評論家」・橘における中国研究のどのような特質があらわれていたのであろうか。

※ 厳密にいえば、橘の記者生活は、一九〇五年、札幌の『北海タイムス』入社に始まる。その翌年の橘の渡満の動機は、中国とのかかわり合いという点でかなり重要な問題である。また、この前半世の期間の中で、彼は一九一八年九月、日本

のシベリア出兵にともない従軍記者となり、チタよりの帰途、ダウリアで脳溢血に倒れ、一時期、死期意識に襲われるとともに、その後、身体に若干の不自由を残すことになる。こうした諸事件の考察は、その思想形成や行動の足跡を辿るうえで、きわめて重要な課題であること、いうまでもないが、本稿の主たるねらいからして、ここではとりあえずは事実の指摘にとどめ、これらの問題に深入りすることを避ける。山本秀夫『橘樸』、中西勝彦「橘樸の思想形成——渡航動機とのかかわりで」（大阪市立大学『法学雑誌』二二卷一号）など参照。

『月刊支那研究』一卷一号の巻頭を占めるのは、むろん橘自身の手によるいわば創刊宣言である。その論説は「支那を識るの途」と題されている。

彼はここで先ず、従来のいわゆる「支那通」が、断片的な智識を寄せ集め、何らの明確な根拠なしに様々の予言をまき散らすという現状をきびしく批判して、「全く別な方法」を提唱する。それは「一言にして之を尽せば科学的方法」、すなわち「支那人を研究するには人種学とか心理学とかの方法に依り」、また「支那社会を研究するには諸社会科学の指示する方法に従ふ」というものだった。ここには、彼がこれまでの「消息通」的情報屋から訣別して、人文、社会諸現象に関する様々の材料の蒐集、取捨選択のうえに、明確な方法的意識をもった社会科学的中国研究を進めていこうとする鮮明な決意が示されていたといっていいただろう。

その具体的内容は徐々にふれるとして——しかしこの場合、橘の論説の示すものは、やはりそれだけにとどまるものではなかった。言いかえれば、彼におけるこうした方法の提唱は、単純に中国研究をより科学的たらしめようとする動機にのみ由来するものではなかった。それはいわば、どこまでも日本人としての「中国を識るの途」へと向けられていたのである。彼は言う。「日本はその天然地理的地位の関係から……支那と密接な関係ある許りでなく、日本の領土及び租借地内の支那民族の一大社会を抱擁して居る」がゆえに、「公的にも私的にも

深く支那人を諒解する当然の責務を負ふて居る」。こうした観点からみる時、『日本人一般の支那に関して持つ智識は貧弱である』。いや、橘のみるところ「一層悪いことには其内容の殆ど凡てが根柢が誤まっている」(傍点―筆者。以下同じ)。こうして彼は、次のように主張するのである。

「彼等の没常識の最も顕著なる实例三カ条を次に掲げよう。

- 一、日本人は一般に支那に対して先進者であると云ふことを無反省に自惚れて居る。
- 二、日本人は支那を儒教の国であると思ひ込むで居る。
- 三、右の誤信とは一見矛盾する様であるが日本人は支那人を道德的情操の殆ど全く欠乏した民族であるかの如く考へて居る」。

私たちは、この断平たる言明の中に橘のなみなみならぬ確信と、そして日本と中国の間において彼が構築しようとする立場をただちに感得することができないのではないだろうか。

すでにのべたように、中国に対する彼の「理智的興味」が「社会現象の一途に傾いて」いった民国五年(一九一六)から、この『月刊支那研究』の発刊までは、ほぼ七、八年間が経過している。おそらく橘の言明の中には、この数年間の中国社会への沈潜と蓄積が容易に動かしがたい重味をもって、その背後にひそんでいるであろう。その在りようを一瞥することによって、ここでの問題性を探ってみよう。

民国五年秋、中国の社会現象の研究を志してのち、橘が先ず没頭したのは、「行政殊に税制の民衆の実生活に与へる影響を調べると同時に、小説を読み耽ること」であった(『月刊支那研究』一卷二号、「時評数則」一六一頁)。前者については、翌民国六年四月(一九一七―大正六年)、早くも彼を主筆とする『支那研究資料』が発刊され、また後者については、とりわけ清末の政治小説、『官場現形記』を中心とする中国の官僚社会、村落及び家族組織

などに関する数年の研究の蓄積がやがて『月刊支那研究』の各号を飾ることになる。

橘が最初に刊行した雑誌『支那研究資料』（主幹は田原天南）は、実のところ、およそいわゆる雑誌の名にはほとんどふさわしからぬものだった。その内容は、ひたすら「支那の制度事物」「政治法制より理財産業」にまで至る、その実態の実証的究明に向けられていた。すなわち「一、支那に関する知識の精確なるものを網羅選択し之を邦語に移して毎月約三百頁の一冊子に綴り真面目なる支那研究者の書架に缺くべからざるものたらしめんとを期す」、「一、体裁は所謂雑誌の流れを趁はず……但法令公文乃至報告論文日記等他日に必須の資料たるべきものは確実に之を録して遺漏なかるべし」、「一、取材は支那官署の調査編製せる各項の文書を主とすこれ邦人に取りて最獲難く且解し難きものなればなり其他列国官私の報告及弊処員の研究するところを以て其欠を補ふ」（『支那研究資料編輯主旨』一卷一号）。そして、この雑誌の主要な部分は、「民国行政紀要」、すなわち民国政府が民国五年末以降、政府公報に連載し始めた「民国行政統計彙報」の翻訳、注釈をもって占められていたのである。

山本秀夫の考証によれば、「民国行政記要」は、ある意味ではかつて臨時台湾旧慣調査会の報告として、織田萬により完成された『清国行政法』を民国時代にまで継続するものだった（山本前掲、三六―三九頁、したがって『清国行政法』の場合と同じく後藤新平とのつながりが推測されている）。実際、その内容は、民国以来の財政、交通、司法、教育、農商などの全般にわたり、その沿革と現状を紹介して詳細をきわめている。政府公表の各種法令、公文の翻訳とあいまって、『支那研究資料』は、まことに民国の制度とその実態を確実な知識の基礎のうえに追求しようとするものだった。いわばそれは、当時の中国の支配機構を、老大な資料の紹介を通じて透視しようとしていたのである。

だが、すでにみたように橘の研究の基本的動機は現実の中国政治の制度的解明自体にあるわけではなかった。

「支那の伝統政治」、つまり民国初年をおおう軍閥政治を「根柢から踏みつぶして了ふところ支那の政造の根本要件」である。この支配機構は、橘にとって「支那改造」のための基本的な対象であった。だとすれば、橘が「民国行政計彙報」の翻訳、注釈という一見無味乾燥な作業に黙々として従事していた時、彼はこの支配機構をどのような地点から透視していたのだろうか。そしてまた、ちょうどこの頃、彼が「支那なる偉大な生物の生命に触れ得たと感じた」と洩らす時、それはどのような生命の秘密を感得したのか。

さかのぼってみると、一九一三年（大正十二年）、橘が大連から北京へと、誕生間もない中華民国の首都に居を移した際、彼が最初に関心を集中させたのは、実は民間道教の研究というテーマだったことに気づかされる。彼は、中野江漢とともに、民間信仰としての道教を「通俗道教」と名づけて、その態様に異様な興味を示した。それは、道教の哲学的研究や、道士によって担われる儀礼・秘儀の研究ではなく、文字どおり民間に行なわれる道教的信仰や行為、思想の在り方を究明しようとするものだった。いわば彼はここで、道教の教えに個人的興味を抱いたのではなく、むしろ逆に、中国の民間に広く普及し、大多数の人々の心をとらえ、動かしている民衆信仰そのものの性格と在りよう、に深い関心を抱いたといっている（この研究は、のち橘樸著、中野江漢編『道教と神話伝説——中国の民間信仰——』として公刊されている。改造社、昭和二十三年）。他方、橘が旺盛な執筆活動を開始する二〇年代前半、『月刊支那研究』の発刊に先立って、彼が先ず発表したのは、「支那民族の政治思想」「支那民族の宗教思想」「支那民族の道德思想」という三部作だった（『満蒙』第五年第四十二冊、四十三冊、四十四冊、大正十三年一月、二月、三月。『支那思想研究』日本評論社、昭和十一年、所収）。それは、いわば中国民衆のものの考え方についての基本的考察にかかわっている。

こうした事実の単純な指摘からも容易に察せられるように、ここに拡がっているのは、あきらかに橘にとって

の中国の「民衆世界」の地平と云ってよいだろう。あるいはまた、民衆生活を現実に動かしている思想、意識、行動を究明しようとする橘の姿勢ともいっていいだろう。「統計彙報」や「法令」の解説を背後から肉づけるものは、まさしくこの「民衆世界」からの視線ではなかったか。そしてまた、橘は軍閥政治下の中国の支配機構を、ほかならぬこの「民衆世界」からこそ透視しようとしていたのではなかったか。「日本人は支那を儒教の国であると思ひ込」み、また「支那人を道徳的情操の殆ど全く欠乏した民族であるかの如く考へて居る」という橘の断言は、たぶん彼のこの「世界」からの発言に属している。いったん中国の「民衆世界」に沈潜した時、そこには、この民族の「政治思想」「宗教思想」「道徳思想」の世界が固有の性格をもって拡がっていたのであり、そしてまた、この社会を成立させている村落や家族組織という細胞が伝統政治の裏側にくっきりと浮び上ってきたのである。

橘の通俗道教の研究、また中国古典——「中庸」や「墨子」についての考察、官僚社会の分析はきわめてユニークな部分を含んでいる。とりわけ民間信仰としての道教といった分野について、橘や中野の研究はパイオニア的役割を果たしている。しかし、橘のユニークさは、彼がある対象について独創的な解釈を打出したといった種類のものであるように思われない。そうした観点からいえば、彼の「支那研究」も、全体としては、厳密な考証、緻密な理論をかね備えているとはいえない。むしろそのユニークさは、何よりも彼が対象へアプローチする際の橘自身の目に由来するといっている。

私はここでは、さし当り橘の多岐にわたる研究成果について、その帰結、結論的部分に直接立ち入ることを避け、どちらかといえば、そのアプローチのユニークさに着目しながらいくつかの論点を指摘しておこう。

彼の「支那思想」研究の最初の成果は、先ず儒教と道教の対比に結晶している。すでにふれたように、橘によ

れば「支那を儒教の国と思ひ込む」のは、「日本人の没常識」の最たるものであった。「日本人は無闇と儒教を買被り、論語一卷で日支民族の思想融和が出来ると夢想するものさへあるが、これ程馬鹿々々しい見当違ひはない」（『支那民族の政治思想』『支那思想研究』所収、三頁）。「古い日本の漢学者達は支那の歴史を皮相的に観察して、儒教の栄えたのはそれが支那の民族性に契合するからだ」と主張するが、支那の社会に栄えて居るものは決して儒教ではなくて道教である」（同前、一二頁）。「一口に謂へば儒教は治者の利益に立脚して組立てられた教義であり、道教はこれと正反対に被治者の思想及び感情を代表するものである。従つて支那民族全体の思想なり感情なりが二大教義の何れにより多く表はれて居るか」と云ふと、申す迄もなく道教である」（同前、三頁）。

私たちはここで、橘の立論の基礎が、「漢学者」流の「支那の民族性」といったものではなくて、何よりも治者と被治者という一般的なし普遍的基軸にすえられているのを、ただちに見てとることができよう。道教は「被治者の思想及び感情を代表する」。したがつて「支那民族全体の思想、感情」をより多く代表するのは、ほかならぬ道教である。もっとも、中国に儒教、道教の二大思潮が存在し、その中で儒教が支配階級のイデオロギーであるのに対し、一般民衆の間ではかえつて道教が支配的であるというのは、ある程度常識的な部分に属するだろう。その意味では、橘の指摘は、それほど事あたらしいものとはいえない。しかし、橘の特色は、こうした事態を何よりも被治者、弱者の目から一貫してとらえているところにある。たとえば彼は政治面における儒教の教義の根幹を、いわゆる「天命説」に求め、それがとりわけ漢代以降、中央集権的な絶対専制の政治を裏づける理論となったという歴史を背景に、儒家に徹底的に対立する老子を次のようにとらえる。「老子は神即ち天とか上帝とか云うものの存在を断然として否認する」。「先づ天命説を破壊しない限り被治者階級を治者階級の無慈悲な檻の中から救出することは出来ない。天命説の最大根拠は唯一神の信仰にあるのだから、有神論を破壊

しなければ天命説に止めを刺すことが出来ぬと老子は考へたのであろう。……老子の政治組織及び治者階級の罪惡に対する鋭い非難の感情が自然に彼の哲學的思索に影響し、彼の理智と感情とが両々相俟って終に無神論なる新思想を結成せしめたものであることは、一度老子を読む者の容易に首肯し得るところのものである」。そして「政治に関する二教の争いに対して私どもは勿論老子の方に味方する」(同前、四一六頁)。

彼の中国古典に対する接し方は、およそ一切の經學的束縛からはまぬかれてゐる。そのアプローチの仕方は、きわめてラショナルであり、その考察は「支那民族の政治・道德・宗教思想」についてのトータルな把握に向けられてゐる。すでにレグやチャイルスなどによつて行なわれつつあつたヨーロッパからの研究をも自在に吸収して、民衆世界そのものに即した彼自身の個性的な目を対象に注ぎこむ。

橘は、孔子に始まる儒教がやがて「絶対專制主義を擁護する道具」と化したと規定したうえで、民衆が「無意識的に政治を呪咀し、実生活に於いて為政者から遠ざかると共に、其の精神生活に於いては救いを道教に求めた」(同前、一二頁)と分析する。なるほど、橘によれば老子その人の思想は無神論である。しかし、老子が神を否定した動機は「支配階級が神を独占することに対する反感及び神が恐怖の対象に過ぎないと云ふ不満」にあり、彼は「此の痛ましい宗教的、又は政治的拘束から民衆を解放しようとして無神論を唱」(同前、二三頁)えたのである。しかし、民衆にとつて老子の主張する「虚無」といった形而上學的觀念が、日常生活に定着することはきわめて困難であつた。人々は、上帝の代りに玉皇大帝を至高の座に置き、同時にその他の神々をも玉皇の分身として崇拜することになる。

こうした橘の理解の当否については、とりあえずはここでの直接の問題ではない。その後の約半世紀の歴史は、道教についてもより緻密な文献的、実証的研究を残している。しかし、そうした研究史をはなれて、ここでより



重要な論点は、橘が道教について、ないしは道教の存在形態について、何よりも民衆の生活という地点から問題を提起しているという一点にあるだろう。救いを求める民衆宗教としての道教は、当然のことながら、もろもろの民間の神々を雑多に包みこむ。一言で、それは幼稚であり、迷信であり、その中にはかえって民衆の不幸を増すようなものも少なくない。しかし、橘はいう。「凡ゆる迷信が無意味又は無理由で発生したとは謂はれない」(同前、二七頁)。そしてまた「今の支配階級が破壊されぬ限り政治と民衆生活のギャップは恐らく何時までも消滅せぬであろう。また此のギャップの消滅せぬ限り非政治的な道教思想は決して民間に衰へぬであろう」(同前、一四頁)。彼の目は、ここでは明らかに道教の教義から民衆生活さらに中国社会の政治へと貫通している。もっとも、およそ民間信仰としての通俗道教が、世界諸地域のほとんどすべての民間信仰と同様に、政治と民衆のギャップの間に生み出される観念的救済物であることは、誰しもある程度予想するところのものであるだろう。だが、橘において、民衆の生活形態、社会の存在形態と宗教、政治とのからみ合いは、一層深い地点にまで突きささる目をもってとらえられている。たとえば、次のような指摘をみてみよう。

橘によれば、たしかに老子は天命説を基盤とする儒教の絶対専制主義を否認するものだった。彼の理想は、周知のように「小国寡民」——「鶏犬の声、相い聞こゆるも、老死に至るまで往来せず」という小社会である。しかし、それでは老子は儒家に対立して一切の政治を否認するものだろうか。「多くの人々は老子を無政府主義者と云ふが、老子を読んだだけでは決してそんな結論は出て来ない」。「無政府主義を形式的に解釈して所謂政治乃至政府を否認する主義であると浅薄に考へる者は兎に角、一切の『人の人に対する支配』を否認する主義である」とすれば、老子の理想とする小社会がそのうちに入らないことは明らかである。単にそればかりでなく、若し老子が此の小社会の中に当時から発生して居た父権的大家族制を承認したものとすれば、彼は無政府主義者どこ

るではなく立派な専制主義者であつたとさへ云へるのである」（同前、九一一〇頁）。橋は、小社会内部を支配する勢力又は制度は大家族主義のそれだと考える。そして、大家族主義とは、とりもなおさず家父長の支配する長老政治に他ならない。彼は、小社会内部における政治をも実に鋭くとらえている。もし、この地点から透視するならば、儒・道二教の対立、抗争にもかかわらず、老子もまた専制主義者以外ではない。そしてこのことは、橋が、何ものにもとらわれることなく、中国社会及びそこに生きる人間の実相をきわめてリアルにとらえる目をもっていたことを示すものではないだろうか。こうしてここからは、単にこの民族の宗教思想、政治思想という次元ではなく、おそらくは、そうした政治あるいは信仰を生み出す、より基底的な実体、すなわち中国の社会組織、村落構造、家族、宗族形態といった課題が重要な結節点として次第に浮上してくることになるだろう。『月刊支那研究』の重要部分を占める彼のいくつかの論説は、この結果、何よりも「支那の社会組織」「政治構造」を焦点として展開されることになる。

私たちは、橋の「民衆世界」から発するこうしたリアルな目を確認したうえで、引きつづきその社会分析をごく簡単に眺めておこう。

彼は、中国社会の「安寧を保証する」要因として、次の四つの勢力を見出した。すなわち「其の第一はギルドであり、第二は家族制度であり、第三は面子意識であり、第四が即ち道教の勸善懲惡の教理」である（「通俗道教の経典」〔上〕太上感應篇解説、『月刊支那研究』一卷五号一〇三頁、『支那思想研究』五二頁）。後の二つが中国社会に生きる人間の生き方を規定し、あるいは結び合せる精神的、道徳的要因であるのに対し、前二者はそうした意識を生み出し、また逆にそれらによって支えられるこの社会構成の基底的組織そのものである。橋によれば、中国という全体社会の中に存在する部分社会として、最も重要な組織は、家族及び宗族結社と、そしてギルドであつ

た。家族は血縁に沿って結合することによって宗族を形成し、また一箇ないし数箇の宗族が結びついて、しばしば村落自治体を形作る。他方、この社会のいま一つの強固な紐帯として、会館、公所、商会などと呼ばれる同郷的ないし同業的団体——最も広義のギルドが存在する。そして、この両者こそが、当時においてもなお中国社会の内実を形成する真の社会組織に他ならない。

周知のように巨大な専制国家としての中国歴代王朝は、文武官僚群をもってこの国を統治したが、この「官僚群の神経末梢は知県衙門に至って止まり、……それ以下に伸すことは不可能」であった。ここに「官僚政治と民衆生活の隔離と云う支那特有の政治現象の発生した契機が潜んで居る」が、こうした事態は、地方の治安を村落自治体に委ねることになる。民衆は、家族、宗族を柱とする村落自治体によって、一方では、自治に任ずるとともに、他方、官僚の圧迫に対しては、自衛のために団結し、斗争する。会館、公所、商会などの同郷的ないし同業的団体は、こうした組織が、いわば都市へと延長されたものに他ならない。一言で、中国社会の内実を形づくっているものはこの二種類の組織であり、そしてそのうえに朝廷ならびに官僚階級が権力としてそびえ立ち、同時に民衆に対して政治的、社会的圧迫、経済的搾取を加えているのである。『官場現形記』を素材とする搾取者としての官僚階級についての彼の分析は、その生態を剔抉して余すところがない。橘によれば、中世、近世を通じての政治、社会組織は、民国になっても、もちろん変ってはいなかった。その変化は、皇帝なきあと、これまで主として文官によって担われていた官僚政治が、今度は一層露骨に武人——軍閥によって担われるようになったというにすぎない。こうしてここには、橘における次のような構図が浮び上ってくる。すなわち、中国社会の基底組織としての家族・宗族―村落自治体及びギルドと、そしてそのうえに展開される官僚政治の権力争奪劇と。だが、すでにふれたように、こうした「支那の伝統政治」の打破こそが「支那の改造の根本要件である」

とすれば、その道は、はたしてどこにあるのだろうか。

伝統社会に対する、意識、実体両面からする橘の把握の方法及びその帰結をみてきた私たちは、徐々に当時の中国の現状分析——「評論家」・橘の本領ともいふべき部分に目を移していかなばならない。

だが、その前に、一つだけ、私たちは今後の行論のためにも、橘の個性的な目という問題について少しくふれておく必要があるように思われる。それは、彼のこうした「目」をもたらしたものが、いったい何であるのかという問題である。これまでの叙述の中で、私はしばしば橘の「民衆世界からの目」について語り、また儒・道二教の争いにおいて「勿論老子の方に味方する」という彼の立場について語ってきた。彼のこのような視点なり立場なりを支えるものは、何であつたのか。

ある程度予想されるように、橘は強烈な個性の持ち主であつた（彼は中学時代、しばしば豪傑ぶりの騒動を起しては、退学、放校処分を受け、熊本の五高でも一年でここを飛び出してゐる。若くして家庭を離れ、郷里を離れ、さらに大陸へと渡つたわけである。山本、前掲書参照）。それゆえにまた、彼は、思想的にも強い「個人主義」的傾向をもつてゐた。いや、むしろそれ以上に、彼は、個性の自由な発展という意味での「個人主義」を、きわめて自覺的に己れの思想の一方の基軸として確立してゐたといつていい。橘のこうした考え方は、広く社会問題についての彼のエッセイの中に鮮明に示されている。たとえば『京津日々新聞』時代、橘はしばしば女性問題を取上げて論評しているが、彼はそこで日本の女性が家族主義と闘ふべきことを訴え、「今日の女子教育の方針及び制度」が、彼女たちの「思想の自然的発達を邪魔するように仕組まれて」いることを痛烈に批判し、次いで「苟くも独立した人格がある以上他の者の方便として取扱はれると云ふ方はない」、そしてまた「個人主義を立て通して行く為め

の苦勞は同じ苦勞でも忍び易いばかりでなく、一種の爽快味をさへ伴ふ」として、そうした生き方に基本的な価

値を認めている（『若い女性たちへ』一九二三、『楠』十二号、一九七八年七月）。しかもその主張は、一転して民国以降の中国の女権獲得運動と日本の女性問題との比較へと展開し、「何故あなた方は現代の女性が正当に享受し得べき社会的乃至個人的権利を男性に向って主張すると云ふ堂々たる態度を採る事を避けるのですか、支那は後進国だとか半開国だとか云って見下して居る事は必ずしもさしつかえがないが、それならばそれに相当した態度を採られたら如何なものでせうか」とまで言い切っている（『支那の女氣質』一九三三年、『楠』十三号、一九七八年十月）。このような態度が、彼の「個人主義的思想」に由来することはあまりにも明らかであり、そしてそれがまた、やがてみるように、一九一〇年代中国の新思潮、新運動への共鳴、さらにはおよそ専制権力の抑圧下にある「民衆世界」への共感へとつながっていることも、容易に理解されるところであろう。

きわめて感覚的な表現になるけれども、橘は、このような己れの「個人主義」を媒介に、中国の「民衆世界」へいわばずっと入っていくようにみえる。そして、この国の政治構造、社会構造を、その地点から透視する。比較的にいえば、それは、これまでわが国の中国問題においてそれなりの歴史的足跡を残した何人かの日本人たちが、あるいは「支那革命」援助、あるいは「支那の民衆を救う」といった、多かれ少なかれ、政治的、イデオロギー的「大義名分」を通路としてコミットしていったのとは、かなり異なっている。そしておそらくその分だけ、橘は、この時点においては近代日本を蔽った様々の国家的ないし民族的使命といったものからは自由であり、それゆえにまた、「先進国とうぬぼれている日本」を、より自由な目で批判することが可能だったといっている。橘は、己れの生き方として「個人主義」を自覚的に確立していた。そしてまた、広い意味での自由主義、民主主義の中に、人間にとっての基本的な価値と社会の進歩とを見出そうとしていた。

だが、私たちはそれにもかかわらず、橘のこうした思想が時代の中で占める位置、あるいは彼の思想そのもの

のにさしかける時代のかげといった微妙な問題についても、やはり同時に注目しておくことが必要であるように思われる。橘は、他方、この頃——早くもいわゆる「王道」という問題についてもかなり長大な論文を発表している。「日本における王道思想——三浦梅園の政治及び経済学説——」（『満蒙』一九二五年五・六・七・九月、『支那思想研究』所収）というのがそれであり、彼がこの主題について述べた最初の文章である。中国古代の政治理想としての「王道」、そしてそれに由来する江戸中期の儒者、梅園の「王道思想」を論じて、いったい、彼は何を主張しようとしていたのだろうか。彼は中国における「王道」の思想を考察して、そこに道德主義、地方分権主義、善政主義という三つの要素を見出している。それは、古代中国の封建制度の時代、その社会的背景を基盤に生まれた一箇の政治理想であり、現代からみれば、当然のことながら、その内容は多くの歴史的制約と欠陥を含んでいる。「人間——民衆は人間である——を道具扱ひにしてその人格を認めることを拒んだと云ふことは、何れの時代に論なく王道思想に一貫した根本的欠陥」である（『支那思想研究』四九七頁）。そしてまた「自然の儘に放仕して置いては王道政治の道德的使命は単に気まぐれものとなり易い。之れが王道論に伴ふ根本的欠陥である」（同前、五一三頁）。しかし他方、橘は、たとえば地方分権主義に対しては、中国においてその時代を超えた、ある種の価値を認めようとするかの如くである。すなわち「王道の重要な一特色は『地方分権的行政組織を通じて直接に民衆の福祉を図る』と云ふにあるならば、所謂聯省自治なり或ひは故孫文の考えて居る様な県自治を実現することに因って王道精神を復活せしむることが出来る訳である」（同前、四八六頁）。いやそればかりでない。「資本主義社会では中央集権が栄え」、「レーニズムもまた中央集権を主張」するが（同前、五一五頁）、橘によれば、時代の趨勢の中で中央集権主義は「下り坂にある」。さらにまた、「（物質的利益利益万能という点で）王道に対する他の一つの大障碍たる資本主義も亦其の全盛期を越したようである」。彼はいう。「若し一部の学者達が推

定する様に将来社会主義の世界が資本主義にとって代りて実現することとなったならば、封建時代以来其の跡を断っていた政治上の道德主義が大きな勢で復活してくるに相違ない」。こうして橘は「斯くの如き見地から王道思想を支那の古代に限って存在し得たものだ」と考へない。其の内容には勿論多くの修正を要するとしても、其の根本的プリンスプルに至っては必ず地球上の人類社会を永久に互って指導するものだと思ふべき」（同前、五一九頁）と主張するのである。

たしかに橘は、「王道思想」なるものが、それこそ二千年以上まえの、特定の歴史的條件に制約された一箇の政治理想であることは十分に承認していた。「善政主義」は民衆の人格を無視した「善意の専制主義」にほかならず、法治主義を欠く「道德主義」は、為政者の全くのたてまえ論にすぎない。だが、それにもかかわらず、なおかつ彼がその「根本的プリンスプル」に大きい価値を附与しようとするのは、いったい何故であるのか。おそらくここには、時代が橘のうえに落すその深いかげをみなければならぬだろう。橘によれば一九一〇年代、全世界をおおった第一次大戦は、その惨憺たる経験を通じて西洋人自身にその「文明の底に秘む、大いなる欠陥」についての反省を余儀なくさせるものだった。その反省は「文明は……西洋文明とは限らず……他の種類の文明にも西洋のそれとは異なった価値」があるという地点へと導いていく。「此の数十年来、国を挙げて西洋文明に傾倒し、東洋固有の文明を忘れていた」わが国も、そしてまた中国も印度も、この点において一つの転機にさしかかりつつある（同前、四七三頁）。それは、橘の認識を支える磁場そのものの微妙な変化という他ないだろう。「文化の發達及び普及は各人の個性を發達せしむると同時に自由に対する欲求を鼓吹する。王道の善政主義は明らかに文明世界に於ける前記の欲求と相反するものである」（同前、五一六頁）。しかし、東洋固有の価値が、時代の趨勢の中で浮び上ってくる時、「王道思想」もまた、その変容を通じて新たな光があてられる。橘がここで、

その「個人主義」あるいは「自由主義」を放棄したのではない。その点についていえば、彼はなお「個性の発達」や「自由に対する欲求」の中に基本的な価値を見出していた。そして彼個人についてみれば、こうした性向そのものは、むしろその生涯を通じてほとんど変らなかつたとすらいいたい。しいていえば、ここにみられるのは、やはりまことに微妙な磁場の変化であり、そして近代日本の辿った筋道との関連でつけ加えれば、「大正デモクラシー」のある種、華やかな思潮と、第一次大戦からやがて「戦間期」へと至る世界史の舞台の暗転との乖離である。橘自身においても、東洋固有の価値は、きわめてアンビヴァレントな形で存在している。ただ私たちはここでは、橘がこうした問題性に対して、もっぱら「王道思想」という、いわば政治的次元における価値の面から接近していることに留意しておいてよいだろう。それは、彼の「個人主義」と東洋における政治理想という政治的課題との間に、ある種の乖離をもたらすことはないだろうか。そしてまた、時代の局面の変化の中で、ついに「評論家」・橘の中における政治の肥大化をもたらすことはないのだろうか。

だが、私たちは少し深入りしすぎたようである。ここではやはり、これ以上問題を展開することは、差しひかえねばなるまい。元へと戻り、ひきつづき先述の課題を追求することにしよう。

#### 四 「中国社会論」から「中国革命論」へ

一九一〇年代後半から二〇年代初めにかけて、橘が中国社会の、いわば「生体解剖」に全精力を傾注していた頃、この国はようやく、来たるべき政治的大変動を示唆するすさまじい予兆を示し始めていた。

いわゆる「文学革命」「思想革命」を前史として、一九一九年には「五四運動」が起こった。二一年には中国共産党が誕生し、二四年には孫文の「国民党改組」が行なわれた。そして中国は、ほどなく北伐——国民革命と



いう巨大なピークを迎えることになる。それはあたかも、橘が、千数百年の歴史を背景にその静態を分析してきたこの社会が、一転して、にわかにその動態を示し始めたにひとしかった。中国社会を構成する諸要因は、この時、いったいどのような動きを示し出したのだろうか。そしてまた、それは、橘においてどのようなようにとらえられたのか。

橘は、「新文化運動」から「五四運動」に至るプロセスを、ほとんど時代の同行者として丹念に跡づけている。その作業は、前述のいわばアカデミックな諸研究と並行して遂行されていた。私たちは、先ずそこでの考察を要約的に辿ってみよう。

歴史の中に置いてみる時、橘の把握は、一言で、きわめて正確だったといっている。このことは、彼が近代日本において一般的だった中国に対する蔑視観からも、また当時の欧米を主とする国際世論の偏見からも自由だったことを意味しているだろう。彼は「新文化運動」の起動因を学生、青年知識層を中心とする「自我の覚醒」に求め、また「五四運動」の激発を「愛国心」ないし「民族意識の昂揚」の中に見出した。今となつては、ほとんど常識に属するこうした指摘も、当時の様々の論調の中でみる時、歴史の大筋の把握において、やはり群を抜いた認識を示していたといっている。よく知られているように「五四運動」に際して、日本の世論は、それが「排日」をスローガンとしていただけに、とりわけ激昂した。雑誌『新青年』に始まる「文学革命」「思想革命」についても、その歴史的意味合いをとらえた人々はきわめて少数に限られていた。「デモクラシー」と「サイエンス」を標榜する「支那新人の新思潮」について、それがもつ歴史的射程を十分に予測しえた人間がどれだけいたかは、甚だ疑わしい。その中であって、橘はいくつかの留保をつけつつも、中国に生きる人々の現実の動き、そこにはたらく歴史の大勢をよく見通している。そして、橘がこうした見通しを立てたことの中には、実は、彼が

己れの中国研究の出発点においた方法がやはり鋭く貫徹されていたのである。いくつかの例をとりあげよう。

内藤湖南の『新支那論』に対する批判として書かれた「支那は何うなるか」という論説は、彼の立場をみごとに浮き彫りにしたものだ（『支那は何うなるか』——内藤虎次郎氏の「新支那論を読む」『月刊支那研究』一卷三号、一九二五年二月、『支那思想研究』所収）。彼はその中で、中国史の碩学、湖南の分析について、いくつかの点で賛意を表明し、かつ彼自身の中国社会に対する認識との一致を確認している。しかし、橘は、内藤の『新支那論』が、たとえば政治と民衆との間の巨大なギャップといった問題について——長い歴史をもつ中国社会の独自な性格を強調するあまり、「政客階級」という特種なクラスが発生して政治を壟断し、其他の人々は一切之れに興味を持たないという支那特有の現象」は、「畢竟、この民族の政治的年令があまりに老いすぎているため」とみるのに対して、彼は全く逆に、これを「若すぎるため」とみた。「支那に発生した政治現象が支那特有なものであるとは云はれない。欧羅巴でも少くも十八世紀の中頃迄は其本質に於いて支那と全く同一な政治が行なわれたのである。即ち西洋のデモクラシーも矢張り歴史進化の産物なのであり、支那の政治とても決して今日の儘に凝固し停滞するものではなく、私共から見ると内藤氏の考えとは正反対に、支那の政治は欧羅巴のそれに比して一世紀か一世紀半程進化の度合が遅れて居る、換言すれば支那の政治は老い過ぎたところではなくして寧ろ若過ぎるのである」（『支那思想研究』三八五頁）。

橘の方法は、先にもふれたように、きわめてラショナルな側面をもっている。「支那事情の興味本位の紹介や「支那通」の横行する中で、彼は、中国社会の在り方をできる限りトータルに、法的に認識しようとしていた。と同時に、彼は、その独自な性格を決して特殊性へと局限するのではなく、むしろそれを他との比較の中に、拡がりの中に、普遍性の中に置こうとしていた。それはまた、中国の現状を「凝固、停滞」の中にみるので

はなく、まさに「歴史進化」の中にみようとするものともいっていいだろう。

『新支那論』において内藤は、前述の分析から、次のような異様な結論を引き出していた。「支那は結局は政客のやかましい議論をさへ恐れなければ共同管理にしよう、と、その他如何なる統治の仕方をしようとも、郷団自治をさへ破らなければ、支那全体の安全を破ると云ふことはない筈である」。中国に対する国際的共同管理案の提唱は、この頃、欧米のジャーナリズムにしばしば登場した重要な論調の一つだった。それは、中国人の「自治能力の欠如と道徳的腐敗」という偏見と断案を前提としていた。こうした主張の背後には、むろん先進列強による中国の「半植民地化」の要求——政治的抑圧、経済的搾取の期待が渦まいていたことはつけ加えるまでもない。橘において、中国の政治的混乱は、それが一見どれほど絶望的な様相を呈していようとも、今やこの国は、明らかに清末以来数十年に及ぶ巨大な社会変革——「歴史進化」の過程の中にあつた。「道徳的腐敗」は、ひとえに旧来の支配階級が示し出す末期的現象の一つなのであり、「シナ民族」はむしろその本来の社会組織においては、かえってすぐれた自治能力を備えている。そして橘の分析によれば、この変革過程とは、とりもなおさず、これまでの支配階級たる「官僚階級」と、そして彼独自の規定に基く「中産階級」との間のはげしい斗争を意味しているのである。

橘はいう。「(内藤氏の主張する) 政客と郷団自治組織との対抗は私の用語によれば支配階級たる官僚階級と被支配階級の一部たる中産階級との間に行はれるところの、意識的或ひは無意識的の階級斗争である」。そして「此の階級斗争は私の全支那觀の骨子を成すものである」(同前、三八八頁)。

橘は「文学革命」から「五四運動」への高まりの中に、「自我の覚醒」「民族意識昂揚」のうねりを、ほぼ正確に見通していた。とはいえ、中国の近・現代史そのものの展開からみれば、これはまだ、この国の政治的、社会

的変革の序幕にすぎない。学生、青年知識層の斗争をきっかけとするこの運動は、彼が分析した中国の基本的構造にどのようなインパクトを与えたのか。いや、より根本的には、こうした基本的構造のどの部分が、どのように変化することによって、この国の社会変革は遂行されるのか。そしてまた、彼の「全中国觀の骨子」をなす「階級斗争」の展開は、具体的には、どのような形で展望されるのか。このことは、橘の中国社会の静態分析が、現実の中国の動きに即応して、一挙に動態分析へと転化していく、その接点を探ることをも意味しているだろう。私たちはここで、橘による伝統的中国社会の見取り図ではなく、さらに中国革命そのものの見取り図へと立入っていく必要があるだろう。

先に要約したように、橘は、中国社会の基底組織——この社会を構成する眞実の社会結合体を、村落自治体、及び最広義のギルド組織の中に見出していた。それは、中国歴代王朝治下の粗笨な政治形態、とりわけ宋代以降の官僚政治の中で、文字通り民衆の自衛のために形成された強固な自治体である。他方、政治を壟断、独占する官僚階級は、自らの手にした特権的地位を存続せんがために、家族、宗族という結びつきを通じて、そこに郷紳階級ともいうべき社会層を形づくっている。つまりここには、権力を独占し、その事実によって、もっぱら經濟搾取をこととする官僚階級と、そしてその対極に、およそ政治とは全く隔離され、村落あるいはギルド組織の中でひたすら日々の生存の営みをつづけつつある民衆とが存在する。そして、橘は、官僚階級の中に、その社会的実体としていわゆる「郷紳層」を見出し、他方これに対抗する広汎な民衆（農民・商人その他）を、一言で「中産階級」と名づけたわけである。清末から民国に至る長期の社会的動乱は、橘によれば、つまるところ、旧中国社会の徐々なる解体と諸列強の侵略のもと、構造的変革が不可避となったこの国において、官僚階級、中産階級の両者がその生存を賭けて展開する階級斗争の過程にはかならない。

橘のこうした分析は、容易に氣づかれるように、歴史の巨視的把握においてはともあれ、その階級分析においてかなりの曖昧さを残していることは否めない。とりわけ「中産階級」というカテゴリーは、官僚―郷紳階級に対する被支配階級として一括して規定されている点において、甚だしく不備な側面を備えている。このあと、ほどなく橘は、二〇年代中葉、マルクス主義理論をも急速に吸収し、そしてまた現実のすさまじい動きに触発されながら、中産階級及び無産階級のより詳細な分析へと足をふみ入れる。しかし、こうした変革への展望において、その最も顕著な特質は、彼が自らの手によって創り上げてきた中国社会認識の構図をきわめてラディカルな形で貫徹しようとしたところにあったといっている。すなわち、橘は、ここでのべた構図を前提として、二十世紀中国の未来を、何よりも中産階級の自治組織――村落自治体、及び公所、会館、商会などのギルド組織が己れ自身の手で政治を行なうこと、言いかえれば、政治的被抑圧階級である中産階級が、まさしく自衛のために、腐敗と混乱をきわめた官僚階級を打倒し、これに代って、新しく近代的な意味での国家をつくり上げて行くことの中に求めたのである。いわば彼は、政治と民衆の間のギャップという積年の弊を克服し、民衆が自らの手によって政治を行ない近代国家を形成していく道を、まさに中国固有の、あるいは土着の自治組織の延長線に見出そうとしたといっている。それは、彼の「全中国觀の骨子」から由来する展望であった。同時にまた、彼の中国認識の忠実な適用であった。そして実は二〇年代中国は、時あたかもこうした中国社会の基底組織が、ちょうど橘の期待にこたえるかのように、静態から動態へと、自らの生存のために独自の動きを開始しつつあったのである。

橘の見通しは、そうした動向と相即し、補強されつつ展開していった。少し引用してみよう。

「重要なことは中産階級者の間に民族政治に対する興味が少くも此の数年来驚くべき勢で擡頭して來た事實である。即ち彼等は官僚の手から自身の手民族政治の運営を移すに非ざれば、彼等の安寧と幸福とは絶対に得ら

れないものであることを意識するに至ったのである。……彼等の実生活に取って必要な組織は今日迄ギルド又はその小規模な聯合にすぎなかったが、階級意識に目醒めた後の彼等としては、到底それに満足して居ることが出来ない。そこで彼等は職業別的聯合から産業別的聯合に進み、地方的聯合から全国的聯合に移り、更に商工業プチ・ブルジョアの聯合から農業プチ・ブルジョアも含んだ中産者の全階級的聯合に進み入ろうとして居る」〔支那人氣質の階級別的考察 附官僚の政治と中産階級の政治〕『月刊支那研究』二卷一号、一九二五年六月、『支那思想研究』二八〇—二八一頁。

「（民族国家）建設事業の基礎を成すものは支那民族の単位社会即ち家族・村落自治体及び商工業ギルドである。……広東省の保衛団聯合はギルドに附属する商団と村落自治体の組織する所謂郷団とから成立したものであるが、それが全省に互つて龐大なる聯合体を形成し得るに至ったのは、主として商工業ギルドの親団体なる商會の力に依つたものである。私は広東省の示した此の一例を、他日支那民族が彼の民族国家を建設する過程の雛形として重要視して居る」（同前、二八五頁）。

二〇年代中国は、ようやくにして、その地底からの胎動を示し始めていた。橘の例示するように、福建、広東、厦門、上海など各地に様々の階層による、それゆえにまた様々の方向性をもつ動きが始まっていた。大都市の商會を中心とする、いわば民族ブルジョ層の行動があり、農村における農民自衛団の動きがあった。とりわけ広東においては、孫文の広州政府樹立という特殊な政治状況の中にあつて、新たな政治的地平が開かれようとしていた。いや、そればかりではない。橘自身が事件に即して詳細に追求したように、一九二五年、「五・三〇運動」においては、こうしたギルド、郷団のほかに、いまや新たに登場しつつあつた中国の無産労働者階級が、旧來のそれとは異なつた社会的存在、組織的特徴をもつた一つの政治的力として出現していたのである。私たちは

ここで、当時の複雑きわまる政治状況、そこに渦まき政治力学について、それ自体を詳細に追出する必要はあるまい。むしろここで、何よりも重要なことは、橘が、中国の国家建設事業の基礎単位を家族・村落自治体及び商工業ギルドに求め、またその建設過程の「雛形」をそれら単位社会の連合の中に見出そうとしていたということである。その把握は、むしろ必ずしも整理されたものではなかった。また、方法的にも理論的にもたぶんの曖昧さを残していた。しかし、それにもかかわらず、ここには橘の中国認識の特色が否定しがたくあらわれていたといっている。

先ず第一に、彼は己れの「中国観の骨子」を徹底的につらぬいている。それは、旧中国社会の基本構造を分析したうえで、しかも内藤のように、「郷団自治さえ破らなければ」、「共同管理」をはじめ「如何なる統治の仕方をする」とも、「支那の安全」は保障されるというのとは逆に、「中産階級」による「官僚——郷紳階級」の打倒の中にのみ中国の未来を見定めている。それは、たしかに橘のみかたの基盤にある、あの「民衆世界」からの目によって裏づけられている。そして、このことはまた、諸外国の中国に対する接し方において、どのような意味においても、この階級つまり、いわゆる「政客」ないし軍閥勢力に依拠すべからざることへの要求となつてあらわれるであろう。「軍閥に拠る支那統一の絶対に見込無き事」、「外国は決して或る軍閥を援助すべからざる事」(『月刊支那研究』一一巻一号、「時評数則」一六七頁)というのは、彼の分析からする、あるいは敢えていえば彼の分析そのものの背後に横たわる強固な信念に由来するものだった。つけ加えれば、それはまた、辛亥革命以後の日本の対中国政策、たとえば「寺内借款」等に見られる、軍閥を通じての中国への政治介入に対する根柢的批判へとつらなっていくものであったといっている。

第二に、橘は、中国の未来への展望を、あくまでもこの国の内発的な動きの中に求めている。家族・村落自治

体及び商工業ギルドの動きは、それがどれほど複雑多様、また一見奇怪なものであったにせよ、どこまでもこの社会の内部から発する動きであり、またエネルギーだった。それは、文字どおり民衆の自衛から発し、その中に新たな組織形成のエネルギーを秘めた内発的な動きであった。逆にいえば、橘の中国社会へのふれ方が深ければ深いほど、おそらく彼は単純な歴史的類推、ありきたりの解釈、既成の理論を拒否していたと表現してもよいだろう。そしてここで少しく視点をかえていえば、実はまさにその分だけ、橘は、いわば孫文ないし孫文主義へと接近していったとみることができる。私たちは橘の見通しに接する時、孫文の三民主義の中の有名なテーゼ、「宗族から国族へ」という主張を容易に想い浮べるのではないだろうか。孫文は、中国社会における「宗族」結合の強さを基盤に、「宗族」がさらに「国族」へと団結することによって、民族の独立、民族国家形成への道が開けることを希求した。橘は、孫文主義が——たとえ理論的斉合性においてどれほど欠けるところがあるにせよ——「自由主義より優れて居る点」を、まさにそれが「尨、雜、なる、寄木細工たる、ところ」に見出していた（『支那婦人の環境及び問題』、一九二九年、『支那社会研究』五八六頁）。それはまた、どこまでも中国社会に内在しつつ、その動きの中に未来を展望しようとした、橘自身の態度でもあったといっている。

だが、もとに戻って、中国の各地各層に胎動し始めたこうした動きは、二〇年代前半、なお混沌たる、しかし不気味な相貌を呈しつつ推移していた。橘にとっても、孫文にとっても、そしてまた中国社会に生きるどの人々にとっても、そこにうごめく力を明確に把握することはほとんど不可能だった。それが一挙に噴出し、革命の構図を劇的に示し出すのは、二六年の後半から二七年にかけての北伐の過程である。いわば橘はやがて眼前に展開されたこの過程、その一刻一刻を、ほとんど息づまるような気持で凝視していたにちがいない。それは、あきらかに橘の構図の検証の場であった。あるいはまた、彼がそこからある根抵的な帰結を引き出すべき歴史的な場で



あった。橘の重要な転期の一つが訪れる。節を改めよう。

## 五 「国民革命」の動態分析——その昂揚と帰結——

一九二六年七月、広州を進発した国民革命軍は、国共合作のもと、破竹の勢いで北上した。華南の地に農民運動がまき起り、この年の暮れ、北伐軍は早くも楊子江沿岸に到達した。二七年三月には、上海で労働者の大ゼネストが行なわれ、軍閥を追放したあと、労働者を中心とする臨時政府が成立した。しかし、翌四月には、周知のように蒋介石の「四・一二反共クーデター」によって、北伐は一挙に方向を変える。七月、国共は分裂し、武漢の国民党—容共左派政権は崩壊する。これを要するに、この一年間の過程は、いまやこの国に明確な形をとって登場したブルジョア階級、地主階級、農民階級、プロレタリア階級などが、複雑きわまりない勢力配置のもと、国共両党を基軸に血みどろの斗争をくり上げた過程にほかならない。

橘は、この激動のプロセスを注視していた。その過程を刻々に追求し、そしてまた、その渦中から新たに蒋介石政権が確立していくという状況の中で、そこに展開された斗争を綜括した。『中国革命史論』に収録された諸論文は、何よりも雄弁にその追求のさまを物語り、この間に彼がものした論稿は、直接関係したものだけでも大小実に二十数篇を数える。とくに上海ゼネスト、湖南の農民運動、四・一二クーデターなど、二七年初頭から半ばにかけて、革命が最も白熱した様相を呈した時期においては、彼の追跡は、あたかも従軍記者のようにすさまじい。すなわち「国民党と武漢労働者」(『満鉄調査時報』二六年十二月)「上海総罷工及びその意義」同二七年二、三、四月)「上海総工会と蒋介石」同五月)、「武漢政府下の農民運動」同六月)「上海無産社会の争奪戦」同十月)……。おそらくそれらは、観察者としての橘が、全情熱を傾けて中国社会の前途を見きわめようとした作業であっ

たにちがいない。

では、ここに抽出された帰結は、どのようなものであったのか。国民党、共産党、コミンテルンなどその指導をめぐって極度に錯綜した、そしていまなお政治的にデリケートな課題を残す、いわゆる「国民革命」について、ここではひとえに橘個人に即しつつ、その把握を迫ってみよう。

政治過程における数多の曲折、また折々の観測の変化にもかかわらず——思い切った要約を加えるならば——橘は、この「革命」に際しては、ほぼ武漢の容共左派政権に最も深い共感を示していたといっているように思われる。彼は、北伐軍の怒濤のような進撃の中で、農民運動のもつ巨大な力量を痛感した。と同時にまた、農民層全体の中での階級分化——自作農と小作農、あるいはプチ・ブルジョア階級に属する農民と農村プロレタリアとの大きい差を見出した。橘の農村における諸階級の分析が急速に深化するのは、この頃からである。さらにまた、彼は上海ゼネストを通じて、都市労働者階級の実力と態様についても、重要な経験を一挙に蓄積したといっている。「上海総罷工及びその意義」は、「内外人」が騒ぎ立てるばかりで、その「内容及び目的を知らず、又知ろうともしない」不注意を強く批判しつつ（『支那社会研究』三二七頁）、その実態をできる限りの情報のうえに究明して詳細をきわめる。一言で、彼は「北伐軍の勝利」を、単純な「軍事的成功」ではなくて、何よりも「専ら民衆の力」の中に見出した（『国民革命軍内部における軍閥勢力』『満蒙』二七年十月、『中国革命史論』一四六頁）。そして、それこそはまた、橘が、中国の前途についてこれまで模索しつづけてきた道の一つの現実化にほかならなかったのである。

ふり返ってみれば、橘の問題の一切の出発点、そしてまたその知的営為の結節点は、まさしく次のような一節の中に示されていたといっている。「支那の民衆と国家、此の両者を結附けること程困難な問題が果して他にあ

るであろうか」(『支那人の利己心と国家観念』『支那研究論叢』二七年四月、『支那思想研究』二九七頁)。この課題を前にして、彼はその解決のための方策を民衆の自衛組織の積極的展開——「武装的自衛」(『支那はどうなるか』『支那思想研究』三八二頁)の中に見出そうとした。それは、端的に、こうした諸組織に対して「武力と政治理想」(『支那の輿論』『支那思想研究』四二二頁)を与えることを意味している。疑いもなく、橘はこうした動きの頂点に、二〇年代の孫文及び孫文主義を発見したのである。

「一九二四年から二六年にかけて、広東省内には潑刺たる小資産階級民主主義的政權が建設せられ、省内の軍閥は朝日を受けた霜のやうに、この新政權の前に消滅した。この時代に軍閥を滅した力は、第一に孫文の意図に従ひ、ガレン將軍の援助を得て蔣介石氏が編成した新軍隊であり、第二に組織された労働者及び農民大衆であった。労働者及び農民の貢献は、革命政府の軍事行動に対して有力な援助を与へたことよりも、寧ろ都市及び農村に深く根を張った前資本主義的政治経済組織即ち士紳及び地主の伝統的勢力——これが軍閥社会の基礎的構造である——に深刻な打撃を与へたことにある」(『中国における軍閥戦争の展望』一九二九年十二月、『満蒙』第十年十二号、『中国革命史論』三九八—九頁)。北伐はこうした力を基盤に展開され、そして橘もまた、いわばこの地点を出発点としつつ、全運動を展望しようとしたのである。

しかし、僅か一年足らずの後、北伐は大きく性格を変える。軍閥社会の基礎構造を打ち砕くべき労農大衆の組織は壊滅させられ、かえって資本家階級と結びついた蔣介石政權のヘゲモニーが確立していく。その基本的原因はどこにあったのか。橘の綜括をきこう。

「一九二六年七月に蔣氏が国民革命軍を率いて北伐の途に上った後、国民党政權の内部は、互に両立することの出来ない左右の二翼に分裂した。小資産階級民主主義政權の不幸はそれのみに止まらず、左翼の武漢政府自体

が湖南軍閥の武力に依存すると言ふ奇観を呈した。勿論左翼国民党及びその同盟者たる共産党の幹部は、充分この矛盾を意識しつつも、彼等の努力によりてその軍隊から軍閥性を排除し得ると考へて居た。併しこの予見は見事に裏切られ、一九二七年の夏から秋にかけて、武漢政府は湖南軍閥と共に没落した。左翼国民党のこの失敗は、これを要するに当時の小資産階級的民主主義の勢力が、尚ほ軍閥や士紳及び地主の前資本主義的専制主義勢力に打勝つ程度に成熟して居なかつたことを物語る。「一九二四年から二七年まで続いた小資産階級政權は、彼等の最大使命たる軍閥戦争終結の任務を遂行することにおいて、前半期に成功し、後半期に失敗した。前半期の成功は、第一に軍閥の規模が小さく且つ分裂して居たこと、第二に組織された農民及び労働者が精鋭なる革命軍と隔意なく協力し得たことによる。後半期の失敗は、第一に国民党の指導者達が革命過程における軍事行動の効果を過信して、労農運動に充分の努力を傾注し得なかつたこと、第二に彼等の基本部隊たりし蔣介石氏麾下の北伐軍が右傾して資本家の武力と変化したのみならず、新たに引入れた基本部隊たる唐生智氏の湖南軍が、武漢政權の必死の努力にも拘らず、遂にその軍閥性を滌除し得なかつたことに原因する」（『中国における軍閥戦争の展望』『中国革命史論』三九九—四〇〇頁）。

おそらく橋は、晩年の孫文ないし孫文主義の展開に対して、多大の親近感を抱いていたといつてよいだろう。国民党改組前後からの孫文は、無産階級の組織化に全力を傾注したが、それは橋の「官僚—郷紳階級打倒」という社会変革に対して、現実にも最も強力な力を提供するものだった。「中産階級」という、かなり漠然たるこれまでの橋の扱え方は、現実の動態の中で「小資産階級民主主義的政權」という形で政治的にとらえなおされ、他方また、橋のいう「村落自治体」の「自衛組織」が、地主層の側に立つ「民団」と貧農を主とする「農民協会」へと分裂していく中で、彼は、後者の力を正当に認識する。たぶん橋にとって、こうした路線の中にこそ、中国の

未来はあった。孫文主義の正統的な貫徹が、中国の社会変革、中国統一への道であった。そして橘は、革命の具體的展開過程の中でみる限り、ひとまずその凝縮点を武漢の左派国民党政権の中に見出そうとしたと決めて決して誤まりではないだろう。

だが、究極のところ、「前資本主義的専制主義勢力」はなおあまりにも強大であった。そしてまた、無産階級の登場は、新たに新興資産階級との間の斗争を生み出し、蒋介石北伐軍は急速に右傾して資本家の武力へと転化する。それは、孫文主義の路線の劇的な挫折であった。

橘は、「国民大革命」のすさまじい政治的ダイナミックスを目のあたりにして、いくつかの決定的な教訓を得ると同時に、そこに展開された現実態に対して、まことに彼独自の把握を示したと云っていいように思われる。しかし他方また、それは彼の今後の進路に対して、ある種の深刻な影響を与える重要な要因でもあった。ここに落された深いかげをみてみよう。

先ず第一に、彼は、中国の変革において武力のもつ意味を一層正当に認識し、確認したと云っていい。すでにふれたように、民衆の「武装的自衛」は、軍閥政治の中でそれに対抗するために生み出されてくる最も内発的な動きであった。橘の目は、この点で、底辺の、きわめて迷信的ともみえる農民団体の動きをも決して見落してはいない。「河南の紅槍会は迷信のヴェールを被っている為に外観上奇怪なる団体とも見えるのであるが、其の實質は各自の農村を軍隊及び土匪の掠奪に対して防禦する為に、命を的にして集った善良なる農民の真剣な団体で、即ち自然発生的の農民運動である」（橘による羅綺園の意見の引用。「支那の輿論」『支那思想研究』四一七頁）。物理的暴力以外に、いかなる支配の正統性をも持たない軍閥政治に対して、これと斗い、これを打倒するには、民衆の武装以外にはなかった。逆に、こうした民衆に「武力と政治理想」を与える権力は、中国の社会変革を推し

進めるという意味合いにおいて、ひとしく是認さるべきであつた。共産党との合作によって展開された北伐に対して、橋は決して単純にイデオロギー的批判は加えてはいない。それが軍閥政治打倒、郷紳階級打倒の大道の上にある限り、彼はむしろそこに示される力を積極的に肯定している。そして、北伐は、民衆と武力との結合、あるいは「民衆の軍隊」(孫文)が、軍閥の打倒において、どれほど偉大な力を發揮するかを何よりも雄弁に証明したのである。民衆の封建的桎梏からの解放は、この道のうえにのみ存在した。それは、橋の「全中国観」からの帰結であり、同時にまた、そのより一層の確認であつた。

しかし第二に、橋は、この道の具体的展開において、無産階級の勢力がどれほど強力なものであるにせよ、この変革が主として彼らによって担われるとは、決して想定してはいなかった。言いかえれば、共産党の理論と行動については、なおきわめて批判的であつた。むろんマルクス・レーニン主義の原則を中国にどう適用するかについては、それこそ中国の共産主義運動自体がさらに長期の過程をへて解決しなければならなかつた課題である。そこには、そもそも中国の革命をどのような性格のものとして理解するか、その主要な担い手は、いかなる階級であるのかといった大問題から始まって、数多くの理論上、実践上の大問題が横たわっていた。いやこの時点においては、コミンテルンの指導も中国共産党の理論も、運動の幼年時代に伴う未熟さをなお余りにも多く身にまとい、かえって数多くの混乱が露呈されていたといつていい。しかし、そうした理論上の次元とは別に、橋は中国研究者として、文字どおり共産党の指導する運動の実態に即しつつ、ある一点で重要なこだわりを抱いていたように思われる。それは、とりわけ中国社会における無産階級、より具体的には、いわゆる「貧民層」の在り方、とらえ方にかかわる問題であつた。彼は、無産階級の実体を構成する中国の貧民の中に、将来を託するという展望をもつことは到底できなかった。「無産者の中で最多数を占めるものは貧農、最大の勢力を張

るものは匪徒である。貧農には殆ど何等の組織なく、匪徒には会党なる大組織があるが、然しこの反社会的なる勢力が、国家の改造とか民族の解放とか言ふ仕事を担当するに耐へないことは多言を要すまい」(『中国共産党の階級闘争観』『新天地』一九二六年八、九月。『中国革命史論』五九頁)。中国社会に現実に存在する無産者とは、「匪徒を覇者とする貧民と農村」(同前、六四頁)に他ならなかった。

たしかに北伐は、一方では農民運動のもつ巨大なエネルギーを示し出した。しかし、この過程は、橘にとって同時にまた、「匪徒を覇者とする」中困農村の構造を顕在化する過程でもあった。「武漢政権の勢力圏内における社会運動の指導者連は、その運動の中から無頼漢を排斥する努力を殆ど全く打忘れて居るもののように見える」(『国民党の再分裂』『満蒙』一九二七年九月、『中国革命史論』一三九頁)。「支那の社会運動における無頼漢の危険性に対して」は、何よりも「深い省察」が必要であった(同前、一四〇頁)。だが、橘によれば、北伐の一翼を構成する共産党はまさにこうした勢力のうえに運動を展開しつつあったのである。「農村無頼漢を主力とする暴動、即ち共産党の所謂農民運動の行為は言語道断の脱線振り」を示している(『北伐軍部内における軍閥的勢力』『満蒙』一九二七年十月、『中国革命史論』一五九頁)。武漢政権崩壊の重要な一因は、こうした地点に求められる。そしてまた「公平に支那の社会組織を観察して、狭義の都市貧民を……革命に参加せしむることは、理論上實際上断じて不可であり、且つ革命の実現を妨げるもの」に他ならなかったのである(『南支暴動の理論及び実際』『満蒙』一九二八年二月、『中国革命史論』二四八頁)。それは、橘が中国社会の現実態を知れば知るほど、ただちに明白になってくる一つの重要な論点であった。

おそらくここに含まれる問題は、ある意味では中国革命全体の鍵をひめている課題でもあったろう。貧農、そしてまた流民、無頼漢、いわゆるルンペン・プロレタリアートをどのように把握するかは、すでによく知られて

いるように、中国における毛沢東路線形成の一つの「隅の首石」であった。私たちは、毛沢東の「中国社会各階級の分析」あるいは「湖南農民運動考察報告」を通じて、その異なつたとらえ方、つまり貧農さらにはルンペン・プロレタリアートをも革命の主体勢力へと転化させていく可能性の模索というとらえ方を知っている。しかし、この時点において、こうした問題そのものを橘について云々することは、もとよりあまりにも当を失ふことになるにちがいない。毛沢東にとつても、それらはなお完全に萌芽的な状態にあった。橘が、匪徒のもつ危険性について声を大にして警告し、共産党の一揆主義的暴動主義を批判したのは、当時の状況からする限り理論的にも実際のにもむしろきわめて正当な帰結だったといつていい。

彼は、「南昌八・一蜂起」以降の共産党の行動についても、きびしく批判する。「私は、南嶺山麓の東部地方では澎湃氏、西部地方では毛沢東及び朱德氏が指揮して居るような農民暴動を、コミンテルン幹部は少くも理論的には否定せねばならぬものと信ずる」（『中国共産党の退却』『満蒙』一九二八年、九、十一、十二月、『中国革命史論』三〇九頁）。「今日では共産党系暴動は既に見込なき換言すれば無意味な反乱となつて了つて居る。然るに……暴動は引続き行はれて、その為犠牲となる農民の生命や財産や農村の生産力は量り知られない。……彼等は尚お……平然として無益且つ残認なる遊戯を憐むべき支那農民に対して続行しようと決意して居るものであるうか」（同前、三一〇頁）。

彼は、前途の展望を、共産党ではなく、左翼国民党の中に見出そうとしていた。それは、北伐過程における共産党の運動―彼らの方向性と努力に対する一定の評価に立ったうえでの選択であった。

だが、私たちはここで、中国の大地から湧き起るこうした諸運動が、橘の認識のうえに微妙なかげり、ないし分裂、あえていえば論理と心情の分裂をもたらししていることをも決して見落してはならないだろう。たしかに橘



にとって、中国の前途は共産主義運動の展開の中に見出すべくもなかった。それは、孫文主義の正統の後継者たる左翼国民党の中に求められるべきであった。しかし、武漢政府崩壊以後、彼の目からする限り、左翼国民党の動向もまた、その期待をあまりにも裏切るものだったといっている。現実の行動を観察しつつ、橘はいう。「殊に私の不思議に堪えず、且つ失望を感じた点は、左派の指導者たちが活動の自由を与えられた時代にさえ、専ら政治及び理論斗争に没頭し、……彼等の理論に照して最も重要なるべき労農及び小市民に対しては、全然背を向けて居たと評しても過言ではない」(『左翼国民党の政治的立場』『満蒙』一九二九年八月、『中国革命史論』三二六頁)。あるいはまた「郷紳階級勢力をその基礎と共に農村から引抜くことは、単に共産主義者の仕事として必然であるばかりでなく、苟くも支那改造を志すほどのものが、必ず破壊せねばならぬところの障礙物である。この点に関しては、孫文思想の正統的継承者たる左翼国民党の理論家達にも浅からぬ錯誤がある。……革命者を以て自ら任ずる彼等が、「打倒劣紳」と言ふが如き不徹底な標語を持って居ることを自ら愧づべきだと思ふ。社会階級の何ものなるかに多少とも理解があれば、郷紳が革命途上の運命的な障礙物であるのは、彼等の個性の『劣』なるが故にあらずして、彼等が全体なる旧支配階級として、最も有力に支那改造の進みを遮ぎるものだからである、といふことを看取し得ない道理はない」(『中国共産党の退却』『満蒙』一九二八年九、十一、十二月、『中国革命史論』二九九—三〇〇頁。——ただし「劣紳」という言葉の解釈については、当時の使われ方からみて、橘に若干の誤解があるようである)。

理論においても運動においても、左翼国民党は、いわば都市のインテリゲンチヤ的政党に墮そうとしていた。中国の労農大衆、小市民から「背を向けよう」としていた。そして、橘は、さらにつけ加える。「これを如何なる圧迫が加っても、命掛けの地下運動を停止しない共産党首領達の態度に較べて、何と著しい相違ではあるまいか。而してこの相違が、決して左翼国民党の名誉でないことは申すまでもあるまい」(『左翼国民党の政治的立場』『満蒙』

一九二九年八月、『中国革命史論』三二六頁）。おそらく橘は左翼国民党の中に中国の将来を賭けつつも、その実態に對しては、はげしく反撥するものを感じていたにちがいない。たしかに、共産党の一時期の行動は、「無意味な反乱」によって非難さるべきであった。それは「憐むべき支那農民に對して」、「無益な遊戯」を続行するものに他ならない。しかし、彼らが、およそ中国の變革者として「必ず破壊せねばならぬ障礙物」たる「郷紳階級」に對し「命がけ」の行動を展開する時、それは、ただその一点においてかえって橘の心情を深く打つものではなかつたろうか。「民衆世界」における抑圧からの解放——とりわけ中国農民の現実の解放をめぐって、彼の理論と心情は、ある種の分裂をみせている。すなわち、左翼国民党の理論的妥当性に対する信念と、そして他方、共産党の運動が現實に示し出す解放斗争の過程に對する微妙な共感と。それは、まさしく国民大革命が橘に提示した新たな問題性であり、またジレンマであつたといつていい。

しかし第三に、「北伐」そのものは、二七年、二八年を通じて、橘にとっては、実はより苛酷な現實を中国に出現させていた。言いかえれば、様々の「支那改造勢力」についての、こうした見通しの妥当性といった問題以前に、およそそれらすべてを圧迫し、あるいは時代を閉塞せしめるような現実が、この国に立ちあらわれつつあつたからである。蔣介石政權は、「四・一二クーデター」以後、資本家階級との提携から、さらに進んで郷紳階級との妥協へと右傾した。これは、つまるところ、新たな軍閥としての「蔣介石軍閥」の誕生に他ならない。橘のこの面での分析は、きわめて鋭い洞察にみちている。しかし、それが鋭ければ鋭いほど、おそらくその状況は、少くとも橘のうえには、一層の重苦しさをもつてのしかかってくるものだったといつていいだろう。彼は、蔣介石政權を「ナポレオンの軍閥」であると同時に「袁世凱的軍閥」であると規定した。それは、蔣介石が浙江財閥の財政的援助を背景に、「寧波ナポレオン」と仇名されるような軍事独裁権を確立したという事実と同時に、他方彼の

支配権が依然として旧来の政治、社会構造に立脚しているという点を明瞭にとらえた規定だった。「事実において彼は軍閥首領であり、資本家階級の政治的代辯者であると同時に、少くも昨年八月（一九二八年八月、国民党五中全会——南京に国民政府成立。―筆者註）以後は地主階級の利益の擁護者でもある。換言すれば、彼はナポレオンの軍閥であると同時に、袁世凱的軍閥でもある」（『支那に於ける軍閥戦争の展望』『満蒙』一九二九年十二月『中国革命史論』三八二頁）。二七年から二九年にかけて、国民党は退却に退却を重ねた。「この退却は単に量の変化に止まらずして、実に質の変化を惹起した」（『資産階級覇権下の国民党』『満蒙』一九二九年九月、『中国革命史論』三六一頁）。国民党は「全然その革命性を喪失し」（同前、三五二頁）、「革命家孫文はその死後三年にして、彼の愛する弟子達から、専制主義者と解釈さるるに至った」（同前、三五四頁）。これを要するに、橘の希求した中国社会の根本的変革は、「国民大革命」の中にいく筋かのまばゆい燭光を放ちつつも、地主層に再び立脚点を移した蒋介石政権の成立によって、完全に挫折したのである。なるほど蒋介石政権は、資本家階級をもバックとする点において、旧来の軍閥とは異なった「資本家と地主（郷紳）の合体」物である。そこには、この構造特有の矛盾が存在している。そして橘は、産業未発達の「支那社会」における「幼稚にして微弱なる労資階級」という条件のもとで、「数において絶対的地位を占める小資産階級が、適当な組織を獲得した」時に彼らがつてであろう巨大な力量への期待をなお決して捨ててはいない（同前、三七〇頁）。しかし、二〇年代初頭から全中国をゆるがせた変革の嵐は、やはりひとまずは過ぎ去ったというべきであつたらう。橘はいう。

「私の採点では、自由民主主義も共産主義も共に支那改造の基本勢力たることに落第し、あとに残ったものは唯一つの国民党のみである。その実、今の国民党は支離滅裂で、従つて『唯一つ』ではなく、大体において三つに分けることが出来る。第一が左翼、第二が右翼、第三が……『国民党軍閥』である」（『国民党軍閥の解剖』『新天

地』一九二八年五月、『中国革命史論』一八二頁。

国民党を名のる新式「軍閥」の登場を前にして、橘は中国の未来をどのように展望し得るのであるうか。いや、それにもまして自由民主主義、共產主義がともに「支那改造の基本勢力」として落第し、しかも孫文主義が無惨な屈折を遂げた時、この国の前途は、どのような相貌をもって立ち現われることになるのか。

考えてみれば、橘の中国に対するコミットメントがどれほど深いものであったにせよ、もとより彼は、必竟、中国の変革についての一人の観察者であるにすぎない。中国の大地にほとんどのめりこむような形で、橘がこの国の研究を志し、その民衆世界に肌身でふれようとしたにせよ、この国は、そこに生きる無数の人々の日々営みによって動かされていくであろう。その意味では、かつて民国初年、橘が「これ程面白い見ものは世界中に少ないだろうと云ふ張り切った興味を持って袁世凱なる名優の打ち続けた道化芝居に眺め入った」(『月刊支那研究』一卷一号、一九二四年十二月、「時評数則」一五七頁)と述べた時の、中国に対する彼の客観的位置は、ここでもまたその観察の対象こそ異なれ、基本的には決して変ってはいない。だが、近代日本を蔽う「中国問題」は、やはり歴史的・構造的という他はないからまりをもってせまってくるあるものである。蔣介石政権の確立とほぼ時を同じくして、やがて「満州事変」が到来する。橘の「アジア主義」への屈折した転換が始まる。その思想的配置図を追求しよう。

## 六 「国民革命」の衝迫

橘が、満鉄本社調査課の嘱託となるのは、一九二五年十月のことである。その間のいきさつや個人的経緯は、あまり明らかではない。すでに中国研究者またジャーナリストとして令名の高かった橘であってみれば、嘱託と

いう、いわばかなりフリーな形で「満鉄」との結びつきは、みかたによっては、ごく自然ななりゆきであったのかも知れない。橘は、この恰好の身分を得て、「満鉄」の発行する諸雑誌を舞台に、より縦横に筆を走らせる。じっさい、先述した「国民革命」の数多くの論説は、『満鉄調査時報』などのメディアに次々と発表されたものである。しかし、ふり返ってみると、橘がこの身分に位置したことは、やはりかなりの程度、彼の視点を「満鉄」に、「満州」に、あるいは日中両国にとっての「満州問題」に比重を置かせる契機となったようにみえる。もっとも、このように言うことは、橘のその後の活動の筋道を、単純にこうした経緯に求めようとするのではない。歴史的にみれば、とりわけ「二十一ヶ条要求」以降、わが国の帝国主義的進出が進行する中で、およそ中国における日本人社会の一員であることは、それだけである共通の運命を担うことを意味していた。やや誇張していえば、それは、いわば植民者的原罪を負うことを意味していた。のちに述べるように、橘はむしろこうした問題性から目をそらすことなく、かえってその課題の解決を生涯の使命とした人間の一人である。しかし、それにしては、日中両国の関係の構造的課題が一層の切実さをもってせまってくるような地点に身を置いたことを含意するといつてよいだろう。そして、こうした視角からみる時、実は「国民革命」は、日本の「満州問題」の頂点に立つ「満鉄」に対しても、異様な衝撃を与えていたのである。

北伐の開始、その展開を眼前にして、「満鉄」を中心とする満州の日本人社会には深刻な反応が生み出されていた。それは、一言で、「国民革命」の波が全中国を蔽い、中国統一のナショナリズムが一挙に「満州」にも押し寄せてきた時、いったい「満鉄」及び「在満日本人社会」は、どのような位置を占めうるのかという問題であった。この問題が彼らにとっておよそ己れの存在基盤をゆるがす最も深刻な課題であったことは、いうまでもな

い。すでにいくつかの研究によって明らかにされているように、一九二五、六年から三一年——「満州事変」前夜に至る諸事件、諸動向は、わが国における「満州問題」を異常な焦燥感のうちに浮上せしめるきつかけとなっていた。一九二五年の郭松齡事件——すなわち奉天軍閥の一首領の反乱は、これまでわが国がそれを支え、またそれに依りかかっていた張作霖政権が決して万全ではないことを知らせるに十分だった。また、「北伐」過程における、武漢政権による九江イギリス租界の回収は、最もドラステックな形で事態の本質をあまりにも明瞭に示し出すものだった。これを要するに、意識において、また実体において、二〇年代後半の中国は巨大な鉄塊を「在満日本人社会」へと打ちこんだのであり、そしてわが国はいわばナショナリズムからの衝迫に全的にさらされようとしていたのである。

※ 「満鉄内部」におけるこうした動きについては、橘との関連においてもかなり詳細な研究が行なわれている。中西勝彦「中国国民革命期における在満日本人の意識——橘樸の『方向転換』との係わりで——」、『法学雑誌』二五卷二号、一九七八年十二月参照。その他、『アジア経済資料月報』中国雑誌改題臨時増刊号、アジア経済研究所、一九七二年、平野新一郎『新天地』解題。松沢哲成「満州事変と『民族協和』運動」、日本国際政治学会編『国際政治』四三号、一九七〇年など。

橘において、この「衝迫」は二重であった。あるいはまた、それは二重性を帯びて橘にせまっていた。すでに辿ってきたところからも明らかであるように、彼は中国における「国家意識の覚醒」、民衆自身の手による、近代的な意味での国家形成の中に、中国の未来を見出していた。このプロセスは、何よりも「歴史進化」の一つの道程ともいべきものだった。その点からすれば、中国における解放・統一ナショナリズムの昂揚は——それが現実にとどのような形態をとってあらわれているにせよ——むしろ橘の歴史的予測が現実のものとなって眼前に展開しつつある過程にはかならない。もし、これが衝迫であるとすれば、その衝迫は、東洋世界の中の一国として

の中国の覚醒が、西洋世界ないしは世界全体に与える衝迫という意味を附与さるべきものであつたらう。「国民革命」のこの昂揚が内包する歴史的意味合いを、いったい誰が黙殺しえるだろうか。しかし他方、もはや詳言するまでもなく、中国ナショナリズムの巨大な嵐は、何よりも近代日本に対して、一つの決定的な問題を浮上させる。すなわちわが国の「満州」における「特殊権益<sup>スペシャル・インタレスト</sup>」という抜きさしならぬ問題に他ならない。それは、端的に、二〇年代中国がその処置をめぐってわが国に突きつけた問いであり、そしてまた、それ以降の中国が全身をふるってせまってきた衝迫であつた。

ふり返つてみれば、この二重性あるいは両者の分裂はその本質において明治末期以降、中国問題に真摯にかかわつたほとんどすべての人たちに、くりかえし襲いかかった苛酷な運命であつたといつていい。よく知られているように、辛亥革命に加わつた北一輝は、やがて中国の「民族的自衛の本能的発奮」という、自らの推し進めたテーゼと「国家主義」の衝突の前に、解決不能の「大矛盾」に直面せざるをえなかつた。あるいはまた、「ヤング・チャイナ」——「青年支那党」に中国の未来を賭けた吉野作造は、「平和の日本」と「平和の支那」との連携を希求しつつ、「軍国日本」の前に、その声を押しつぶされていった。それらは、およそ近代の日中関係そのものを規定する歴史的磁場というほかはないものだった。そして、この苛酷な運命は、「国民革命」の現実を眼前に、もとより橘においては、より一層の切迫さをもってせまっていたといつていいだろう。

さて、橘は、一言で、この分裂ないし矛盾を、具体的には日本が「満州」において純経済的権利のみを確保すること、つまり経済的開発による日中の「共存共栄」の道の模索という形で、克服ないし突破しようとしたかにみえる。その頃、「満鉄」では、こうした状況の中で、己れの存在基盤を求めて「満鉄の特殊使命」が云々され、また「社員会宣言」（一九二六）が発せられるなど、ある種の新しい動向がみられたが、橘はそうした動きをきつ

かけに一つの明確な方向を打出して、いう。

「私の考えて居る支那政策中特に満州に関する部分だけを略説するならば、第一に満州に対する日本の政策を純経済的な立場に置き換へることである。即ち政治的軍事的野心を其の根柢から放棄するばかりでなく、人口政策の対象として満州を取扱うことを潔く断念すべきである。……第二には満蒙に於ける既得権中前項に照して不  
必要なるものを整理することである。大正四年日支協約の修正は申すに及ばず、ポーツマス条約に根拠する利権中にも廃棄又は修正を要するものが少からぬやうである。……第三には局地的に領事裁判権を撤回することである。……私見によれば此の新政策は支那民族が新に起した底力ある国家思想に鑑みて、単に日本のみならずあらゆる列強が早晚其の好むと好まざるとに論なく追隨せねばならぬ所のものである」（『支那批判の新基調』『満鉄読書会雑誌』大正十五年十一月、前掲『橋』八号、一九七六年十月所収、三一―二頁）。

おそらく橋の主張は、中国ナショナリズムの衝迫の中にあつて、既存権益の保持のみならず、ともすれば逆に「居直り」、さらには野放図に膨張しようとする国権論的風潮の渦中で、日本の要求をぎりぎりにまでそぎ落し、同時にまた、中国との協調を求めようとする精一杯の選択であつたといつていい。橋は、日本の特殊権益に固執しようとする人々の無謀な盲目さが、はっきりとみえていた。「私の常に不思議に感ずることは満州問題が、支那人の立場からは申すまでもなく日本人として考へる場合でも支那問題の一部であると云ふことに明確な認識を持つて居ない様に考へられる事である。……これを要するに日本人特に在満邦人は満州の普遍性に目を閉じてその特殊性のみを高調したがる癖がある。彼等は何より先にこの偏見から脱却する必要があると思ふ」（『在満邦人の支那及満州論策批判』『満蒙』一九二七年六月、『橋』十号、一九七七年七月所収、二九―三〇頁）。そしてまた、日露戦争以来の、「満州」に対する日本の心情的・情緒的執着についても、橋はあくまでクールであつた。「何万の骨を曝



し何億の金を使って得た特殊地位だと云ふ議論もあるが、それは愚痴であつて他人様には通用しない」(同前、四〇頁)。しかし日本人のこうした無理解、偏見という問題以上に、たぶん橘には、日本の運命についてはるかに暗い予感があつたろう。彼は、いう。「私は如何なる事情及方法に依るとも、満州を平戦時を通じ軍事的利用の目的物とすることには絶対に反対せざるを得ない。支那人が怒るからではなく、日本を抜くべからざる苦境に陥る恐れがある故である。……私は……満州に於ける特殊地位の確保を希望するものではあるが、唯その中から国防的意義を固執すること丈は断念して欲しいと思ふ」(同前、三六頁)。

橘の基本的立場は、中国ナショナリズムの衝迫の前に、中国問題の一部分としての「満州問題」を、純經濟的問題へと再構成し、逆にそれが軍事、政治問題へと突出していくことを防ぐことにあつた。

この時期の橘が、彼の属する祖国の窮迫の兆候の中にあつて、ある種のナショナリスティックな心情の高ぶりをみせていたとは到底思われない。また、日中両国のこうした状況の中にあつて、彼の分析的理性がその論理性をいくらかでも失つたとも思われない。橘は「満州問題」についての前述のような対応策を提示するとともに、この間(二七、八年—三一年)、「北伐」の挫折、蔣介石政権の徐々なる確立という過程を、それまでと同様あくまで冷静に分析する。だが、中国問題「評論家」としてのこうした一貫性にもかかわらず、ここでただ一つ明らかかなことは、「国民革命」——その一連の推移が示し出したあらゆるインパクト——をきつかけとして、「中国問題」は、橘において次第に「日本問題」へと転化しつつあつたということである。その意味合いは複雑だった。それは、単純に切迫しつつある「中国問題」を日本の立場から、日本自身の問題として考えようというのではなく、むしろそれは、彼の希求する「中国問題」の解決を、日本とのからみ合いの中で考えようという意味において、「中国問題」の「日本問題」への転轍というふうに表示した方がいいかも知れない。

「九・一八」が、おそらくは出しぬけに橘の全身を打った時、こうした問題性は一挙に表面化することになるだろう。章を改めて、彼の「方向転換」を考察しよう。

## 七 「方向転換」——アジア主義への屈折——

「九・一八」「柳条溝事件」から翌三二年「満州国」建国に至る過程は、これまで多くの研究によってかなり詳細に究明されている。広く日本近代史、さらには一九二〇年代、三〇年代の世界の動向の中においてみる時、まことに「満州事変」とは、近代日本の政治的・経済的諸矛盾の一切が、ほとんど「歴史」の「見えざる手」によって導かれつつ、一気に爆発したものというほかはなかったように思われる。橘もまた、こうした時代の運命を同時代人として共有した一人の日本人であつたにちがいない。

橘が「九・一八」を迎えたのは、後半世の彼の最も重要な仕事として残された『満州評論』を、編輯責任者として発刊してから僅か一カ月後のことだった。このことは、様々の時代の予兆の中で、彼もまた、何人かの同志とともに、来たるべき三〇年代以降の歴史に身構えようとしていたことを示唆するものであつたかも知れない。

「柳条溝事件」に接して以降の橘の態度、判断、決意は、冒頭にもふれたように、きわめて明確な形をとって顕在化した。三一年十月、彼は、関東軍参謀、石原莞爾、板垣征四郎との会談を重要なきつかけとして「王道国家・満州」の建設にその夢を賭ける。

私はここで、そのプロセスを、いわば彼のパーソナル・ヒストリーとして微細に追求する意図はもっていない。ここでの焦点は、ただ一つ、彼のそうした判断と決意をもたらしたものは何であつたのか、そして「満州国」建国という未来への展望を準備した思想的枠組みは、どのようなものであつたかという点にしぼられる。そ

これは、橘の心情のレベルにまで十分にゾンデを下すことにはならないかも知れないが、しかし日本と中国というからみ合いの中で生み出された政治的構想の一つを、一箇の思想的課題として検証することにはなるだろう。

橘の「方向転換」を時代の中で考察しようとする時、私にはそこに、一つのキー・ワードが浮び上ってくるように思われる。それは、ほかならぬ彼の全中国観の帰結として抽出された先述の「武力と政治理想」という言葉である。すでに何回か指摘したとおり、「官僚階級と中産階級との斗争」において、被支配者階級としての「中産階級」に「武力と政治理想」を与えることこそが、橘にとっての中国変革の道であり、中国再生の道であった。中国は、太平天国運動以来すでに七十年を経過した「軍閥時代」の最終期にあり、あたかも唐末五代、七十年の軍閥乱世の時期とパラレルに、いま「支那民族は……近世国家を生み落す陣痛に悩んで」いる（在滿邦人の支那及滿州論策批判、前掲『橘』十号、三四頁）。だが、これまた詳細に辿ってきたように、この「武力と政治理想」をもたらすべき国民党の「北伐」が、当初は諸軍閥を「朝日を受けた霜のように」懷滅せしめたものの、地主階級、ブルジョア階級、無産階級間のすさまじい政治力学の前に忽ち挫折した時、橘は、その前途を、いったいどこに見出しえたらうか。

ここで、この「武力と政治理想」という基本範疇の中に、「関東軍」という「力」と「王道政治」という「理想」が滑りこんだといえ、むろんそれは、あまりにも短絡的にすぎることになるだろう。問題は、その思想的構図において、はるかに屈折している。そして、その屈折の中にあつて、「国民革命」のプロセスそのものがやはり深いかげを落しているといつていい。論点を要約していこう。

「国民革命」の挫折を経験して、おそらくは橘を襲ったものは、彼自身の、同じく深い挫折の感情であつた。それは、単純に孫文主義の挫折、つまり孫文主義の正統の後継者たるべき左翼国民党の墮落ということよりは、

むしろ「支那社会の構造」それ自体を再度提示したともいうべき、蔣介石新軍閥の登場の事実に由来している。

「ナポレオンの軍閥プラス袁世凱的軍閥」としての蔣介石軍閥の出現は、「近世国家」生誕の起点としての「官僚階級対中産階級」の斗争が、荒々しい政治的動態を展開しつつも、結局のところ、右へ右へと中国の進路を吸引していった、この社会の抜きがたい旧体制の体質を、ほとんど否定しえない明瞭さをもって示し出すものだった。たとえば、次のような一文をみてみよう。「九・一八」からほぼ四ヵ月後の一九三三年一月、橘はいう。

「いかにも支那民族の粘着力は強い。併しそれは民族意識に根ざすものであって、所謂国家なる觀念とは全く何等の關係なきものである」（『回顧と展望』『満州評論』二卷一号六頁）。

橘のこうした表現の中に、むしろ「柳条溝」以後の彼自身の態度決定が存在していないわけではない。しかし、かつて「歴史の進化」について語り、また「支那民族が新に起した底力ある国家思想」を一切の政策の基礎とすることを提言した橘にとって、この言明は何というへだたりを示していることであろうか。いやむしろ、ここに示されるものこそは、「国家意識の覚醒」「近世国家の創出」という、かつての期待に対する橘の深い失望が、一八〇度反転した形をとってあらわれたその姿ではないのだろうか。

橘が「満州事変」そのものに即して、自らの状況認識及びそれに基く見通しを生々しい形で展開するのは、前掲「回顧と展望」と題する翌三二年一月の論文である。そしてその路線は、政治的状况による幾多のジグザグを経験しつつも、少くとも彼自身の論理と心情においては、その後、一貫してほとんど変らなかったといっている。この反転の形をより具体的に明らかにするためにその基本的内容を確定してみよう。

橘は、いう。「（九・一八の）爆発の結果東北政治機構の最上層たる張家の勢力がふっとんでしまふと、雁首を失ふた軍閥機構はバラ／＼に崩壊し、郷紳及び地主を上層に載くところの農業社会は久しく彼等の頭上を圧して

ゐた政治経済的勢力から解放せられ、彼等自身の判断と利害とに従って新たな統治機構を創造し得る機会が与へられた……。この革命的な機会に面して東北の民衆がいち早く選んだところの政治的題目は、(一)永久に軍閥支配再現の機会を防止すること、(二)支那本部の循環的動乱から絶縁すること、(三)その為には国民党勢力の侵入する機会を杜塞せねばならぬこと、(四)同時に中部支那から漸次北上しつつあるところの赤色農民軍運動の侵入する機会を杜塞せねばならぬこと、(五)是等の複雑多端なる目的を完全に達成する為には絶対的なる保境安民の実行、換言すれば旧東北四省を版図とするところの新独立国家を建設する外ないこと等であつた」(同前、六頁)。

この文章は、あきらかに奇怪な表現をとっている。ここで提示されている六項目は、「東北の民衆」が選びとつたというよりは、やはり橘自身のものというほかはないだろう。こうした倒錯の背景にひそむ問題性はあらためてふれるとして、しかしここには、橘の認識と彼の選択があまりにも明瞭にあらわれているにちがいない。

先ず第一に、「九・一八」の「爆発」は、それが何ものの手によつて行われたにせよ、橘が多年にわたつて「支那改造」に対する基本的阻碍物と考へてきた「軍閥権力」を吹きとばすものだった。そこには、中国の新たな創造の基盤が出現している。

しかし第二に、「支那本部の循環的動乱」すなわち依然として「軍閥勢力」を再生産しつづける中国社会の社会的磁場は、この「東北四省」をも潜在的におびやかしている。したがつて、そのおそれを断ち切るために、新軍閥としての国民党勢力、そして「赤色農民運動」を指導する「共産党勢力」は、ともにこれを排撃しなければならぬ。

こうしてここに、絶対的「保境安民」の保障としての新独立国家が必須の要請となる。

橘がここで、二〇年代中国からの強烈なインパクトを、きわめてずらした形で受けとめていることは、一見してただちに明らかといつていいだろう。「国民革命」の一連の推移は、すでにふれたように、一方では、中国における統一ナショナリズムの急激な生成・成長を示唆していた。かつて「満州を舞台にして日露の両国が勝手に戦争をしても……一向驚かなかつた程底知れぬ鈍感さを示した」「支那本部の人民」は、「今日では大連郊外……で日本の企業家が支那の労働者を虐待した」事件に対し、「広東の労働組合が猛烈な抗議を提出する程の敏感さ」を示し出した（「前掲」「支那批判の新基調」『橘』八号三一頁）。まさにそれが、「在満日本人社会」に与えた強烈な衝撃であり、かつ橘にとつても一箇の本質的な衝迫であつた。だが、橘は今やそれを「支那本部の循環的動乱」という言葉の中に閉じこめ、それからの絶縁をはかうとする。そしてまた、かつて日本の「特殊権益」の実をひたすら経済的利益の一点へと収縮することによって中国との協調を求めた橘は、ここでは逆に、政治的介入へと飛躍することを通じて、新独立国家への道を開こうとする。「九・一八」をきっかけとする、このねぢれはあまりにも明らかである。

だが、橘における最大の問題は、このねぢれが単純に「九・一八」を是認し、従来の日本の「特殊権益」を擁護し、さらには国家利益を主張するものでは決してなかったというところにこそあつた。いわば彼は、こうしたねぢれにもかかわらず、中国の将来の進路、そして中国ナショナリズムの衝迫によつてのつびきならない場に追いつめられていた日本にとつての「中国問題」の解決を、まさしく広い意味での「アジア主義」への屈折の中に求めたのである。それは、一方では、あらゆる意味合いにおいて彼自身の中国観の反射であつた。しかし他方また、それは、「中国問題」が急激に「日本問題」へと転化しつつあるという状況の中で、己れの思想的生命を賭けての橘の飛躍をも意味していた。

橘の建国構想の中に、過去二十年の中国体験に裏打ちされた、彼なりの確信がどれほどの純粹さをもって秘められていたか、しかし逆にまた、そこにほとんど名状しがたい自己矛盾がしのびこんでいたか——私たちは、彼の構想を最も純化された形でとりあげてみよう。

彼は三三年初頭、「波高かるべき昭和七年を迎へて」、己れの建国構想を次のように書く。

「一、保境安民を徹底する為には新独立国家の建設を絶対に必要とす

二、公民に依りて組織せられる、民族聯合国家たるべし

三、分権的自治国家たること

四、国民の生活に対する完全保障を建前とすること

五、国家自治指導部なる臨時権力機関を設けて各級政府と対立せしめ、各種及び各級自治体の組織並びに運用を指導せしむること

六、七、八（略）」（『回顧と展望』『満州評論』二卷一号七頁）。

ここには、現実の社会的また政治的諸条件をにらみ合せたうえでの波の建国構想の骨組みが、荒削りながらよく示されている。「民族聯合国家」「国家自治指導部」といった構想は、周知のように、「五族協和」あるいは「協和党—協和会」といった形で、具体的な建国過程における最大の論点となったものであり、これらの諸課題は、「満州建国」過程の裏面史を多彩にいろどりつづけている。しかし、これまでとの関連に即していえば、おそらく橘の構想の最大のポイントは、「分権的自治国家」の建設という地点に求められるにちがいない。そして、私たちは、そうした構想が、橘においてきわめてナチュラルな形をとって流露したであろうことを、もはや決して奇異とはしないだろう。この構想において、「国民の自治に対する保障」は何よりも先ず「各民族社会の伝統

的自治（家族、部落、ギルド、農会、各種の互助団体等）」に求められた（『満州新国家建国大綱私案』『満州評論』二巻一号二九頁）。それこそは、中国社会がその基盤において保有し、かつあらゆる制度、機構がそのうえにのみ打ち立てられねばならない基底的社会形態であった。さらに「町村、県、省、国等の新自治（作物保険・移住紹介、職業紹介等の社会政策を含む）」及び「各種協同組合」が、この国家においては「国民の自治」を一層強固に保障する筈である。

しかし第二に、私たちはここで、橘がすでに二〇年代前半、「王道思想」の名のもとに「地方分権主義」の中に大きい意味を認めていたことを想い起してみてもよいだろう。それは、資本主義的あるいはレーニン主義的中央集権主義に対して、新たな時代の中で、新しい意義を賦与さるべきものであった。それは、その発生において中国古代という歴史的規定性を受けつつも、「東洋」固有の価値を内在させた一種の政治の在り方であった。「分権的自治」は、中国の歴史と社会を基盤に、最も内発的な形で未来へと展開されるべき新しい形態なのである。まことに、橘における「国民革命の挫折」は、「満州事変」をきっかけに、複雑な屈折をへつつ、まさしく「分権的自治国家・満州国」の建国として、「東洋」固有の価値、いわば「アジア主義」的原理を基軸に、再度、結晶しつつあるのではあるまいか。

ここで「アジア主義的」というふうによぶのは、もとよりかなり曖昧な表現であるにはちがいない。それは、さし当り、広く近代西洋の提示する諸原理に対して、何らかの意味で、東洋（アジア）社会の存在形態の中に固有の価値を見出そうとする思考を指している。事実、橘自身においてすら、この時点においては「王道政治」あるいは「分権的自治国家」成立の理論的根拠が、充分具体的に解明されていたとはみられない。いやむしろ、彼のその後の思想的営為は、かえって現実の進行に推されつつ、ほかならぬその根拠を懸命に模索することに向け



られていたとすらいい。のちに彼が提出する「ゲゼルシャフト的西洋社会」に対する「ゲマインシャフト的東洋社会」——「東洋共同社会論」といったいくつかのテーゼは、むろんすべてこうした試みの所産である。ただ、一つだけ明白なことは、橘がここでもまた、己れの中国社会論のラディカルな貫徹——まさしくその延長線上に「王道国家論」を展開しようとしていることである。言いかえれば、それは決して「満州建国」のための観念的粉飾ではなかった。少くとも橘において、それは何よりも「国民革命の挫折」によって閉ざされた中国社会変革の道を、再度、東洋社会に見合った形での独自の政治形態の創出、東洋的価値実現の路線として、新たな場において追求しようとするものだった。むろんこうした東洋的価値とは、未来へ向けての一個の要請である。それは要請である限りにおいて、なお虚空に架けられた橋であると同時に、しかしまたその限りにおいて、およそ東洋諸国——建国さるべき「満州国」、中国さらには日本をも含めて、その今後の在り方を規定すべきものである。ともあれ、橘は、まさに中国と日本とのはざまにあつて、いわば「アジア」Ⅱ「東洋」をテコに、前方へと飛躍したのである。それこそが、橘の「方向転換」のもつ本質的な意味合いの一つであった。

だが、こうした、橘の「東洋的価値」を求めての飛躍にも拘らず、私はやはり、この建国構想自体の中に蔽いのような現実的矛盾が横たわっていたことをもまた、同時に指摘しておかなければならないだろう。橘は、「満州国」が「分権的自治国家」であるべきゆえを、このように「伝統的自治団体」の内発的展開に求めながらも、他方、それを、いま一つ、農業国家としての「満州」に求めようとした。いやむしろ、さらに進んで、資本主義工業国家のアンチ・テーゼとしての「永久的農業国家」の建設に求めている。「満州新国家建国大綱私案」において、彼はいう。

「満州社会の主要成分たる漢・満・蒙・鮮民族は、概ね農業を生業とするが故に、この上に樹てらるる新国家

が農業国家たるべきことは疑を容るる余地なし。農業国家は理論上、工商業国家即ち所謂資本主義国家に化成する自然の傾向を有すれども、資本主義の弊害より免がれんがために、前記の如き自然の傾向を阻止し、永久又は半永久に農業国家として存続せしむること決して不可能にあらず、満州はその国民多数の福祉及び日本との特殊關係に鑑みて、永久的農業国家たるべき運命を有す。而して農業社会に対する合理的統制の機構が分権的自治国家たるべきことは多言を要せざるところなり」（同前、二八頁）。

「永久的農業国家・満州」という規定の中に、資本主義の弊害に対する彼なりの批判が一つの理念としてこめられていることはたしかである。しかし、現実の日中関係の中でみる時、疑いもなくこの規定の背後には、「工業日本・農業中国」という一つの前提的構図が厳然として存在しているだろう。あるいはまた、「工業日本」と「特殊な関係」によって結ばれた農業中国という構図が前提されているだろう。この場合、「工業日本」が、建国さるべき「満州国」に対しても「資本主義的工業国家」としての欲望をほしきままにしないという保証は、いったいどこに存在しうるのか。歴史の後代の地点に立ってみれば、ここに内在している途方もない現実とのへだたりは、むろんあまりにも明瞭である。そして容易に予想されるように、橋にとって、この構図は、「分権的自治国家（＝永久的農業国家）・満州国」建設という理念を、現実には一個の完全な虚偽——すなわち帝国主義国・日本の資源基地としての「満州」へと転化させるか、あるいは「分権的自治国家」確立のために、「工業国日本」に対してそれを可能ならしめる確固たる位置づけ、規制、それにふさわしい政治形態を与えるかという、二者択一へと導くほかはないだろう。「方向転換」以後の橋の前に拡がっていたのが、こうしたすさまじい亀裂であったことは、もとよりつけ加えるまでもあるまい。

だが、最後に、私たちは、このような建国の構想を現実担保する力、いわば政治的主体の問題についてふれ

ておかねばならない。それは橋にとってむしろ先ず何よりも関東軍であった。「今次の行動」を起した「関東軍中堅将校」II「将校団」であり（「私の方向転換」『満州評論』七卷六号、『著作集』第二卷一八―一九頁）、そしてまたまさしく「革新」ファシズム勢力としての軍部であった。彼が「九・一八」以降、最初に筆をとった論文が「満州事変とファシズム」と題されていたことは、彼のこの「事件」に対する接近の地点を示して、きわめて示唆的という他はない。前掲「私の方向転換」という有名な一文は、「事変」後三年をへて書かれたものであり、当然のことながら、そこにはかなりの整理が加えられている。しかし、彼が「板垣・石原との会見」によって明白となった諸点として列挙する次のような認識は、彼がそこに盛りこもうとした理念、期待、筋道をあますところなく示していたといっている。

すなわち「かくも蕞爾たる小集団」が「斯くの如き威力を発揮し得た」のは、「本国に於ける同志将校の大集団が其の背景に立つ為であり」、「更に其の背後に全国農民大衆の熱烈な支持があつた為であること」。

さらに「今次の行動の直接目標はアジア解放の礎石として、東北四省を版図とする一独立国家を建設し、日本はこれに絶対の信頼を置いて一切の既得権を返還するばかりでない、更に進んで能ふ限りの援助を与ふるものであること」。

そして「それと同時に、間接には祖国の改造を期待し、勤労大衆を資本家政党の独裁及び搾取から解放し、斯くて真にアジア解放の原動力たり得る如き理想国家を建設するやうな勢を誘導する意図を抱くものなること」（同前、一八頁）。

近代日本の歴史をふり返る時、たぶん私たちは日中関係の構造そのものが、わが国にもたらした本質的な思想的課題について、あらためていくつかの感慨を抱かされるにちがいない。この言明の中に働いている力学は、た

たとえば「辛亥革命」へのコミットから『排日愛国』の「五四運動」への直面をへて、やがて「二・二六事件」へと歩んだ北一輝の場合と、その構造において、おそらくは同様のものだった。わが国の中国侵略は、およそ「アジア」の一国という立場に立つ限り、近代日本に深く突きささった意識における刺であった。隣国中国の変革、進歩に対する期待は、この現実の前に、「アジアの解放」の理念を媒介項として、ついには「日本の改造」へと行きついていく。戦前の日本において、いわば「アジア」の立場から、多少とも中国の変革にかかわろうとした人たちの中で、この回路をよく脱出した人物は——尾崎秀実のようにナショナリズムとインターナショナリズムのはざまへ向けて思い切った跳躍を試みた場合を除いては——ほとんど見当たらない。それは、近代の日中関係を強固に規定した一つの磁場であり、あるいはまた運命的な呪縛でもあった。橋と北とはその思想の構造において、また歴史的位相においてむしろ大きく異なっている。たとえば橋にあつては、全体としてより多く「中国問題」自体が「日本問題」を嚮導しつつづけており、他方、逆に、近代日本の構造分析とりわけ権力にかかわる問題については、北の把握ははるかに鋭利である。しかし比喩的にいえば、北における『支那革命外史』と『国家改造法案』の占める位置は、橋の『中国革命史論』に収められた諸論稿、そして「国体論序説」——『職域奉公論』のそれと、ほとんどパラレルではなかったか。

ともあれ、橋の建国構想は「分権的自治国家」の理念のもと、「革新ファッショ勢力」としての関東軍を基本的な支点として出発した。それは、「国民革命」が挫折し、かつ「自由民主主義も共産主義ともに支那改造の基本勢力たることに失敗した」と観念された時、緊迫の三〇年代を迎えて、彼が切り拓こうとしたぎりぎりの政治的突破口だった。まことに橋における「国民革命の挫折」は、いまや「東洋的政治理想」と「革新ファッショ勢力」としての関東軍の「武力」という奇怪な形をとって、ここに倒錯した影像を結んでいるという他はないだ

ろう。これは、橘における決定的な転機であり、転換であった。彼の対象とする「中間問題」が、逆に恐しい重圧をもってせまってきたところに生まれた選択であった。むろん橘の思想と生涯は、これを転機として名状しがたい矛盾に引き裂かれることになるだろう。

こうして、橘の思想的営為は、いったんこの道を歩み始めてのちは、何よりも「分権的自治国家」の理論的基礎づけとしての「王道論」の提示へと向けられる（王道の実践としての自治『満州評論』一卷一五号、一九三二年十二月、『王道史概説』同九卷一五号―二三号、一九三五年十月―十二月、その他）。いやむしろ、この道が彼自身の扱ひとった一個の要請である以上、それは一層イデオロギー的に昂進し、さらにはやがて、先述したようないわゆる「東洋的共同体論」の構築へと彼自身を導いていく。「評論家・橘」は、「イデオログ・橘」へと変貌する。だが、橘のこのような努力にもかかわらず、それが帝国主義・日本の国家意志の貫徹の前に、あたかも木の葉の如く翻弄される運命にあっただろうことは、むろん私たちにとおよそ想像に難くはあるまい。

よく知られているように、「王道国家・満州国」建国の夢は、あまりにも短命だった。橘が「徹頭徹尾革命的であった」と語った「自治指等部」は、事変直後の三二年十一月に発足しつつ、僅か四ヵ月後の翌三二年三月――「満州国」成立（三月一日）から半月後――に姿を消した。それに代って結成された「協和会」（三二年七月）は、その在り方をめぐる内部抗争をともしつつ、そもそもの結成当初から官制の組織となり、さらに二年後の改組（三四年十月）にしたがって、政府の宣伝機関へと転化していった。橘の希求した自治の芽は、その成長の余裕もないままに圧殺され、彼がしばしば「創業」のよき時代として回顧した「本庄レヂーム」の時代は、僅か一年で終わった。これを要するに、日本資本主義、本国の官僚勢力が、ほとんど瞬時にして「分権的自治国家・満州」の夢を打ちくだいたのである。私たちはここで「満州国」そのものの歴史について詳細に辿る必要は全くあるまい。

「満州事変」勃発の一九三一年から、三七年の日中全面戦争の開始、そしてさらには一九四五年に至るまで、その歴史は日本の中国侵略及びそれに対する中国の抗日戦争という視角からみる時、文字どおり一直線の歩みである。橋のこの間の軌跡は、彼がいったんコミットした「満州建国」の構想と現実の事態の推移との、すさまじいまでの亀裂を架橋しようとする必死の努力という一言に尽きる。彼は、早くも建国二年後、「一昨年の夏以来、満州国に関する有らゆる……現象に就て、只の一つも愉快な消息に接」せず（『自治から王道へ』『満州評論』六卷二二号、『橋樸著作集』第二卷二二四頁）、「客観的方面について言えば、吾人の展望は一層陰鬱」（『田園裡の日系官吏』『満州評論』六卷十号、同前三三八頁）と述懐し、あるいはまた「随分変わったものだ」「これから先き何う変わるだろう」（『国家の成長過程と建国の理想』『満州評論』八卷一号、同前、三五四頁）とはげしい不安を洩らす。それは、橋の内面の苦痛をまざまざと示し出すものであったにちがいない。しかし他方、橋は「満州国」が日本帝国主義の実質的植民地と化し、日本の資本主義勢力が圧倒的な力でこの国へ入り込んでくればくる程、一層その是正、その防波堤を「革新ファッショ勢力」としての関東軍に期待する。「満州事変そのものは資本家イデオロギーに対する勤労者イデオロギーの勝利の結果」であった（『低調となった建国工作』『満州評論』七卷十一号、同前、三五三頁）。「関東軍が根強く植え付けた伝統の為に、満州ではファッショ勢力が絶対優勢」であり（『日満結合の政治過程』『満州評論』五卷二三号、同前、一三四頁）、それが「敢然として非資本主義的ファッショ的径路」を歩むことを決意する時（同前、一三三頁）、前途に一縷の展望が開ける筈である。彼は、しばしば「満州国政府の建設計画」に対して、その是正を「現在直に頼り得べき勢力」としての「関東軍司令部」に期待する（『建済建設の補正』『満州評論』四卷十二号、同前、二三〇頁）。それは、橋においては、一方では「満州建国」の実態に対する痛烈な批判ではあった。

しかし他方また、それがどれほど倒錯したものであったにせよ、それ以外には依るべき力を見出しえぬ、「非資

本主義的ファッショ勢力」としての関東軍に対するせつばづまった期待であった。少しく先走っているならば、おそらくここからは、日本そのものの改造の希求に至るまで、ほんの一步であったにちがいない。彼は『満州評論』を発刊してから十年をへたのち、次のように書く。「もし日本の体制に著しく変化が起り、其の結果、満州国が今日までとは性質の異なった民族政策の採用を可能ならしむる如き状態が起ったとすれば、そこに初めて私共が十年前に期待したような民族協和の關係が実現するのではあるまいか」。そしてまた、「日本の社会が否応なしに一場の飛躍をせねばならぬ時機が既に頗る緊迫して居るようである。……この飛躍とは上御一人を中軸とするところの国家改造の重大過程であり、この過程を経たのちに、日本国民は初めて新鮮且つ有効な政治力を把握し、随つて満州に堆積する幾多の問題も、ここに漸く解決の正しい鍵を手にすることが出来るであらう」（回顧と展望）『満州評論』二二卷十三号、同前、三七八九頁）。

だが、私たちはここで、主題に即しつつ、後半生の橘の歩みについて、その論点を思い切つて集約していかねばならないだろう。すでに摘記したところからも明白であるように、「満州事変」以後、後期の橘は、純然たる超国家主義者の相貌をもつて立ち現われる。一九三〇年代、ファシズムが「革新」の名をもつて登場した勢力配置図そのままに、そして最終的には、橘は「上御一人」による国家改造にすべてを期待しようとする。冒頭にもふれたように、「国体論序説」―『職域奉公論』がその代表的な所産であり、そして「資本主義的工業国・日本」を「職業的デモクラシー」に立つ「職業的自治国家」へと改編するというのが、彼がそこで描き出す要約的な構図である。しかし他方、この間、橘が「満州国」の建設そのものについて、「農民デモクラシー」を基調とする「農業的自治国家」実現のために、様々の重圧、障碍に抗つしつ渾身の努力を傾けつづけたことは、やはり指摘しておかなければならない。橘の愛弟子、佐藤大四郎が、この構想を実践すべく、一九三七年、綏化県において

「合作社運動」を恐るべき努力をもって展開したこと、しかしそれがやがて「合作社事件」（一九四二）の名のもとに関係者全員の検挙を呼び起し、佐藤自身ついに獄死の運命に見舞われたことは、すでによく知られている（田中武夫『橘樸と佐藤大四郎——合作社事件、佐藤大四郎の生涯』龍溪書舎、一九七五年、その他参照）。橘は、むろんこの「合作社」——協同組合運動の理論的指導者であった。それは、「満州国」という特殊な政治的・社会的条件に規定された様々の矛盾をはらみつつも、底辺からの「農民デモクラシー」の建設を志向する試みであった。この運動が、橘にとっても、また佐藤にとっても「満州国」建国に賭けたその理念の重要な証しであったことはいうまでもない。「満州」を舞台とし、さらに日本へと射程を伸ばした後期・橘の行動は、それなりの一貫性とそしてそれに伴う苦斗によっているとされていたとって決して過言ではないだろう。

しかし、橘のこうした軌跡が、様々の思想的コンテクストにおいて、検討すべき重要な問題性を含んでいることを十分に認識しつつも、私はここではやはり、ただ一つの問題へと課題を収斂させていきたいと思う。それは、一言で、橘の「中国社会論」の行くえである。あるいはまた恐るべき急角度でわが国が滑りこんでいった日中戦争の中での、彼の「アジア主義」の行くえである。日中の全面対決という苛酷な状況の中で、橘の中国論は、いったい、どのような相貌をとりえたのか。そしてまた、戦争中の橘の中国認識を決定的に特徴づけたものは、何であったのか。私は、最後に、このような考察へと視点を移しつつ、後半世の橘の思想の軌跡をしめくくすることにしよう。

## 八 「日中戦争論」——その光と影——

橘個人に即してふり返ってみるならば、「九・一八」以降の彼の様々の努力、期待にもかかわらず、いわゆる



「時局の進展」は、彼自身の予想をはるかに超える急ピッチで展開したというべきであつたにちがいない。「満州建国」が一段落し、その体裁をととのえる余裕もないままに、忽ちにして長城線を越えての、日本の華北進出が始まった。「柳条溝」から僅か六年後の一九三七年、蘆溝橋での銃声は、日本の中国全面侵略の合図となった。「王道楽土・五族協和」の「満州国」の建設とは、まさにそのための前段階にすぎなかったことがあまりにも明瞭となった。帝国主義・日本は、いまや橋の構想を完全にふみにじり、それを破産せしめ、そして橋自身を引きずり廻し始めたのである。

日中戦争の勃発以降、橋は、いわば明白に「行動の人」となるといい。一九四五年、日本敗北の年に至るまで、ほぼ八年間、彼は度々華北また華中を視察し、「満州」を旅行し、かつ長期の日本滞在を通じて諸般の活動に従事する。むろん橋の主要な行動の場は、依然として第一義的には文筆活動にあつた。彼が「評論家」としての役割、立場を放棄したわけではない。ここで「行動の人」というのは、橋が、日本の内外両面にわたる政策とりわけ大陸政策を、彼が期待するところの正しい軌道にのせるべく、一切の活動をこの実践的目標に集約していたことを意味している。それは、「支那研究者」としての時代はもとよりのこと、関東軍の武力を支柱に、ある意味では特殊地帯ともいふべき「満州」に「理想国家」の構想を描きつつあつた時代ともはっきりと異なつていた。日本と中国は、今や中国本土において相互の生存を賭けて全面的に激突しており、中国について何ごとかを語ることは、とりもなおさず日本そのものの在り方を問い、その方向づけに関与することを意味していた。あらゆる言論活動が直接に行動へと結びつく他ない局面が到来していた。しかし、彼の全生涯を通じて眺める時、こうした事態はまた同時に、橋が「満州建国」という、いわば迂廻路をへたうえで、再び漢民族そして中国社会そのものに全身をもって打ち当るといふ初発の時点への回帰というべきであつたかも知れない。

日中戦争のさなか、橘はすでに還暦の年に達し、しかも度々の入院という病軀をおしつつも、文字どおり恐るべく多面的な活動を展開した。「昭和研究会」への参加、日本の論壇への登場、「東洋共同社会論」の提示、そして何よりも刻々に展開する戦争の局面に応じての対華政策の具体的提案など、それらはまことに彼の生涯の悼尾を飾るにふさわしい。だが、日中戦争を通じて、究極のところ、彼がつかみ出したものは何であったのか。あるいは、より端的に、彼は日中戦争の現実そのもののの中に何を見たのか。

蘆溝橋事件を「新京」で迎えた橘は、翌一九三八年一月、早々に北京へと旅立ち、華北一帯の政治情勢を視察したうえ、「北支那視察報告書」を起草して満鉄に提出した。これは、「七・七」以降、僅か半年後にまとめられた「報告書」であった。だが私の見るところ、この「報告書」は、早くも戦局初動の時点において、しかもまことに橘独自のアプローチをもって、その日中戦争観をあますところなく示し出す一文であったように思われる。それは、この時代に書かれた数多の論文、文章の中で、戦争の本質及びその帰趨について最も鋭い洞察を示した第一級の報告書であると同時に、また橘の戦争中の活動の一切がそこから流出する基底的認識を形成するものだった。おそらくそこには、橘の日中戦争論が最も凝縮された形で開示されているといつてよいだろう。私は、その生々しい在り方を検討することを通じて、ここでの課題を追求してみよう。

※ この「報告書」は、「長期抗戦とその対策」と題して、『満州評論』十四卷八、九号——三八年二月二六日、三月五日——に発表されたが（『著作集』第二卷所収）、それは公表をはばかる部分を削除したものだ。最近、関係者の努力によつて原文が発見され、山本秀夫氏の解題とともに『橘』三号に掲載されている。

必ずしも長大とはいえないこの報告書を一読して、ただちに看取されるのは、橘がこの戦争の本質を何よりも先ず「ゲリラ戦」の中に見出したという基本的な一点である。橘はいう。「速戦速決の正規戦は南京陥落で終り

を告げ支那事変は……長期戦の時代に遷った」。「国民政府側は……国内的にはその軍事行動の基礎を都市から農村に移し、国際的には英、蘇等に対する依存関係を一層深め様として居る」（前掲『楠』三号、四六頁）。そして、この農村を基盤とするゲリラ戦こそは、これまで共産党が主として採用してきた基本戦略であり、同時にまた国民政府が「長期抗日」を意図する限り、これに依拠せざるを得ない方法なのである。この本質規定からする橘の洞察は、無類の鋭さを示している。おそらく次のような見通しは、その適確さにおいて、ほとんどわが国の何びとも比肩しえなかったものであったにちがいない。長文をいとわず引用してみよう。

「一、従来の正規戦では必ず常に日本側が攻勢をとり且つ必ず勝利を占めたが、ゲリラ戦では主として、支那側が攻勢をとり、日本側及び臨時政府側は常に之になやまされざるを得ない。

二、原則としては、ゲリラ戦は正規軍と呼応してその効果を収め得ると云うが、単にそればかりでなく日本占領地域の奥深く、支那正規軍から独立してゲリラ戦を組織し臨時政府治下の都市や農村を占領して、そこに抗日政権を組織する事も充分可能である。

三、今日京漢及び津浦鉄道沿線では、鉄道の両側以外の広大な地方は挙げて土匪団の治下にあるか然らざれば職業化した半土匪的な武装自衛団の支配下にある。そして之等の武装団体は容易に占領地帯の外圍に駐屯する支那正規軍及びそれを根拠とする政治工作隊の指揮に従って今日の混戦状態から脱出し、一定の方針の下に統合整理される可能性がある。それには民族意識と云ふ精神的紐帯以外の多少の物質的援助を与える必要がある。

四、第三項は支那にゲリラ戦を組織し得る特殊にして豊富な社会的基礎の存在する事を示すものであるが、然し単純なるゲリラ戦には発展及び永遠の可能性がとばしい。必ずそれに前記の如き簡明にして適切な

經濟政策を随伴せしめ、この両者を綜合した各級政權を組織せねばならぬ。

五、かくの如き組織が戦線に沿ひ、特にその背後地たる占領地域内に簇生し、極端な言葉で云へば切角多大の犠牲をしのんで正規戦で獲得した地方を、まことにたわいなくゲリラ戦で奪い返される事にならぬとも限らない。而してこの事は吾人が満州に於てすら即ち過去の東辺道や現在の三江省や牡丹江省で経験した所である」（同前、五五―六頁）。

この「報告書」の他の部分でも援用されているように、彼は彭徳懷のゲリラ戦に関する論文をすでに目にしている。中国問題専門家として、たぶん橘はその他いくつかの特殊な資料をも手にする機会があつたろう。しかし、容易に看とれるように、ここには「北伐」以来の中国の政治動態についての彼の全経験と蓄積が、さらにはまた「満州建国」過程における一切の体験が一個の見通しへと凝縮、昇化されているといつてよいだろう。彼は一九三四年、宋慶齡が主催した「対日作戦宣言及びその基本綱領」（一九三四年）にまでさかのぼり、あるいはまた中国共産党の「抗日救国十大綱領」（一九三七年）を引きつつ、抗戦中国が展開しようとするゲリラ戦の本質を縦横に説明する。

だが、橘がこの現地視察において見たものは、こうした戦局把握が「北支那方面軍司令部」においても、その政治經濟機構たる「特務部」においても絶無という、「悲觀のほかかない」情勢であつた。「私は深い杞憂を抱きつつ現地に臨んで見たのであるが、現地の情勢は私の予想よりも一層悪い」（同前、四七頁）。そしてまた「両者間（日中それぞれの対応を指す―筆者註）に横たはる余りに大きな間隔に、私共はただ呆然自失するほかかないのである」（同前、五九頁）。橘はすでにこの初動の時点において日中間の対応の絶望的なへだたり、そしてそこから導き出されるであろう帰結について、たとえようなない暗い予感を抱いていたのであろうか。だが、そうだとすれ

ば、その原因、そしてまた、その打開の方策は、いったいどこに求められるのか。

「私見に依れば、軍当局は支那事變の対象に関して恐らく無意識の間にそれを資本主義国家と同一に取り扱い、一世紀半前にナポレオン一世が悩まされたスペインやロシアの分権的封建社会が、今日の支那に一層悪い状態に於て存在すると言ふ特異な事情を忘れて居様に見える。第二に、斯様な社会に於けるゲリラ戦の価値は、前記の如く近十年来支那本部及び満州で屢々例証されたにかかわらず、不幸にして資本家イデオロギーにとらはれた幕僚達の之等の先例に対する評価がすこぶる不充分である様に思われる。……第三に、仮令ゲリラ戦の重要性を認識し得てもその対策として政治経済工作、即ち嘗て列举した様な敵側の緒条件、たとえば人民自治、……土地政策……の如き方法に対抗して、それを克服し得る様な政策を樹立する事は、現在の北支那方面軍作戦幕僚や、特務部幕僚の能力の及ぶ限りでない」。まことにそれらはほとんど構造的な原因であった。客観的にも、また主体の側においても、わが国がこれらの諸原因を明確に認識し、それに応じた方策を樹立することは、不可能に近いというべきであった。「第四に、ゲリラ戦対策の有効な内容は……資本家地主イデオロギーから之をシボリ出す事は甚だ不自然である。それは必ず重農思想の参加を待つて始めて完成すべきものであり、その点に於ては改めて重農派側と資本家側との新たな妥協を必要とすると思う」（同前、五九頁）。

橘は、日中戦争遂行の基本戦略として、彼のいう「重農派」すなわち農業国家・中国の特質を肌身をもって認識し、資本のためではなく、中国農村の安定を第一義的に志向する勢力がヘゲモニーを握ることにすべてを期待した。この絶望的な状況を打開する道は、橘においてそれ以外にはなかった。戦争の全期間を通じて彼が主張しつづけたのは、極言すれば、一切の対華政策の基礎を農村の安定にすえ、そしてまた、そうした対華政策が日本のすべての内外政策をひきづらねばならないということに尽きていた。そうした点からいえば一九四一年、日米

の開戦すら、橘にとって決定的なインパクトを及ぼしたように思われない。彼において、この戦争の本質はどこまでも、同じくアジアに属する両国——日中の戦争という事実の中に存在していたのである。

だが、橘のこのような洞察を可能にしたものは、いったい何であったのか。

橘の論稿をみると、——一見、奇妙にきこえるかも知れないが——とりわけ蘆溝橋事件以降の彼の観察は、日中戦争を戦いつつある中国の実態について、一層鋭いリアリスティックなひらめきを示し始めるように私には思われる。それは、いったん中国社会の内部にもぐりこんだのち、再びそこから浮上したところに得られるような省察であり、あるいはまた、あたかも自らが日本と戦いつつあるという立場を想定したうえで獲得されるようなリアリズムである。この「報告書」においても、両者の採りうべき方策、手段、可能性等について、その考察は、恐るべき冷静さを備えているといつていい。橘は、たしかにここで、北伐の挫折、蔣政権の誕生、日本の直接侵略という過去十年の経験を醸成させつつ、中国社会のリアリティにしっかりとふれていたのである。おそらくそれは、日本が当面の相手として戦いつつある中国が決して近代的な資本主義国家ではなく「分権的封建社会」であること、しかし同時に、いま日本の侵略に対する民族的抵抗斗争の中において、この国がある独自の筋道を通りつつ、決定的な生みの悩みを経験しつつあるという基本的な認識に由来していた。そして、こうした認識こそは、彼がその生涯のほとんどすべてを賭けて追求してきた「中国観」のぎりぎりの場での展開であることを、もはや私たちは決して疑うことはないだろう。「報告書」において、橘はいう。

「元来支那には共同社会の自然発生的な統治形態として、地主富農の寡頭政治たる部落自治が行はれて来た。次に……現在では国民政府の支配の下で組織された……資本家地主的な地方自治が相当広く行はれて居る。最後に共産党の組織した労働者農民本位のソヴェート式地方自治がある。……地方自治はゲリラ戦に於ける政治工作

の中心題目」である。「国共両党はこの方面に大きな力をそそぐと思われるのであるが……この場合ゲリラ戦の遂行及農民生産力の拡大と云ふ切迫した必要に順応する為、地方知識分子を中心とする、能率的な行政組織がその中に附加される必要がある。そしてこの新しい組織が沈滞せる古ぼけた自治的共同社会に、新しい生命を吹き込む機縁となるであろう」(同前、五二三頁)。

日本が中国本土へと進攻を開始した時、この国は己れの社会形態に見合った形での民族斗争を全力をあげて開始した。中国は、ゲリラ戦の帰趨を決する地方自治の在り方に従って三つの地域にわかれた。すなわち地主富農の寡頭政治たる伝統的な部落自治の行なわれる地域、及び資本家地主的な地方自治が支配的な地域、そして労働者農民本位のソヴェト式地方自治が組織されつつある地域。それは、近代国家の蔽いを取りはずし、この社会の実体に即した目をもって眺める時、鮮明に浮び上ってきた一個の政治地図に他ならない。橘は、まさしくこの目をもって抗戦中国の姿を凝視したのである。

ふりかえってみると、橘の認識は、国家を離れ、あるいは「満州建国」といった権力機構問題を離れて、あたかも地をほうように中国社会の低辺に密着すればする程、より一層躍動し生彩を増すように思われる。彼が眺めた政治地図は、ひとえに自治という民衆の政治の実体を基盤に組み上げられた地図であり、そしてその民衆に対して、いかなる政治勢力がどのような政策を展開しつつあるかといういろどりををもって描き出された見取図であった。それは、むろん単純な軍事地図ではなかった。いや、政治的勢力配置図ですらなかった。それは、何よりも民衆の生活の在り方と政治権力とを太い線で結び合せたところに得られる社会的な勢力配置図であった。

だが、このような政治地図を手にしたうえで、橘は、どのような基本方針を主張することになるのだろうか。これまで橘の足跡を辿ってきた私たちは、やはりある種の感慨をもって記述せざるをえないが——それは、再

び、かつて彼の構想した「分権的自治国家」あるいはまた「共同体国家」の建設へとひたすら志向するものだった。いや、戦争という苛烈な局面の中にあって、その構想は、橘においてより直接的に日本の大陸政策ないし今後の戦争の目的そのものへと転化する。

「この立場から見ると場合ゲリラ戦対策は、吾人の大陸政策の根本課題たる東洋諸民族（その実質は農牧大衆）解放の問題と一気に連続」する。「（中貧農を中心とする華北農村の安定、発展は）、とりも直さず農民デモクラシーの基礎の上に健全なる共同国家を建設する事である」。「（それは）原則としては日本の大陸政策即ち東洋諸民族の西洋覇権からの解放、一層現実的に云へば支那国家改造の基本条件内で解決せられるべきものであり、機会主義的にそれを変更したりそれから逸脱する事を許さないものである」。そして「（こうした）政策の執行者こそ、主観的にも客観的にも、支那民族の解放者、理想国家の建設者である事を主張し、西洋文明の双生児たる帝国主義及共産主義勢力を背景として、東洋主義運動に敵対する国共二党の誤診を充分に排撃する事が出来るであろう。斯くして吾人は、……東洋民族解放の戦線を凡ゆる西洋主義勢力に対して永久に且つ必勝の見透しに於て張り通す事が出来るであろう」（同前、六〇―六三頁）。

戦争当初における彼の必死の献策ということを精一杯割り引いてみても、ここに存在する「東洋民族解放」の理念と日本の中国侵略という現実との乖離は、やはり無惨な程に明らかという他はないだろう。ここでは、「支那国家改造」「農民デモクラシー」という彼の「中国社会論」は、わが国の中国侵略という現実の中に浸す時、「東洋民族解放」のスローガンが指し示す方向とは全く逆のヴェクトルをもって虚空に浮遊している。「アジア主義」へと屈折した彼の思想の軌跡は、いまや日本そのものに「支那民族の解放者」「理想国家の建設者」たることを要請し、そしてこの戦争の中に「西洋覇権」からの東洋民族解放の戦線を見出そうとするのである。



私たちは、ここに存在する矛盾についてさらに掘り下げる必要はないだろう。それは、日中戦争の意義をめぐって、広く日本全体をおおった本質的な思想的課題にかかわるものであり、そしてまた、この戦争に対して、どのような立場からの意義づけを試みようとも、つねに現実そのものがこれを裏切り、さらには自己欺瞞へと人を導いていくような種類の矛盾であった。

だが、正直のところ、中国を知ること深ければ深いほど、橘が戦争の現実の提示する様々の矛盾に対して無自覚であったとは到底思われない。むしろ逆に、そうした点についての自覚こそが、一層彼を行動にかりたて、現実に対して真正面からいどみかかるようないくつかの言葉を吐かせたにちがいない。橘は、こうした公的な文章とは別に、戦争についての個人的感懷を洩らしている。翌一九三九年、彼は知人に次のように告げている。「已に満州の領域を超えて北支に及んでいる。何とか喰ひとめたいものだ」と必死に説いてみたが、言論の及ぶところではなかった。支那がどんな国であるかも知らずにやるのだから実に恐しい」(前掲、山木『橘樸』二九六頁)。そしてまた、のち『職域奉公論』の冒頭、「序説」において、橘は次のように書く。「(一九三九年一月)北支那視察の結果私の神魂を震撼せしめた疑問は容易に解かるべくもない。……元来私は日露役直後に大陸に渡ったまま殆ど帰国しなかったので、其間に起った日本民族の道德水準の驚くべき変化を見のがして居た」。「私が三十年来心の奥にあたためて来た日本民族の指導者の性格は果して永遠にほろびたのであろうか」(二頁)。

一九四二年、日中戦争が完全な対峙段階に入り、日本が大陸において何ら明確な政策を打ち出しえないままに推移している中で、橘は、自ら「戦術的方向転換」を宣言し、「新郷土主義」を提唱した。それは「重慶政権は買弁資本に、延安政権は小農民にその熱心な支持を受けている」のに対し、「独り南京政権(王兆銘傀儡政権を指す——筆者註)のみは……確かな社会的地盤を固め得ない」(『協同組合論』『著作集』第三卷三二六頁)という状況認識のも

と、かつての中貧農を中心とする合作社運動から大きく後退し、「曾國藩風の地主的郷土社会建設」の方向へと転換しようとするものだった。「長期戦争に由る日満華の疲憊」「国共の社会的・経済的基礎と対抗する為の技術的要請」に応じて、「保守的な曾國藩主義に、能動的な大地主兼産業資本家を加へてこれを推進力とし、單純な郷土主義から、それを成分とする東洋的民族主義に發展するよう誘導する」というのが、その眼目であった(『郷土資本に依る多角的農企業の提唱』『満州評論』二三卷一七号『著作集』第三卷二四二頁)。彼が明言するように、たしかにこれは戦術面での後退であった。「重慶」「延安」に対して、「南京政権」のみはいかなる「社会的基盤」——むしろ正しくは民族的基盤というべきであったにちがいない——をも保持しえないという現実の中にあつての、せまられての止むを得ざる選択であつた。しかし、もはや疑いようもなく、これは、橋自身の全中国觀からすれば、その理論的破産であつた。地主・豪紳の打倒——人民自治というかつての構図は、はるか後景に退き、ほかならぬ日本占領地区——「淪陷区」において「曾國藩主義」が提唱されようとしている。「東洋零細農民数億の解放」「農民デモクラシー」実現の道は、日中戦争遂行という現実の前に屈伏し、いまや「地主富農の寡頭政治」たる伝統的部落自治こそが、そっくりそのまま日本の依るべき基盤、支柱となる。

しかし、この頃になると、さすがに橋は、その内面においては、戦争の最終的帰結をはっきりと理解し始めていたようである。一九四二年、日中間をあわただしく何度か往来し、次いで四三年八月、最後に日本を離れて以降、敗戦、その死に至るまで、橋の三年間の行動はかなり詳細に明らかにされ(前掲、山本『橋樸』参照)、その間の彼の述懐もまた断片的に伝えられている。四二年秋、橋は、次のように語った。「日本軍は今まで中国で勝手なことばかりやっていて完全に敗北している。今後残された道はただ一つ。それは日本の技術をもって新しい郷村の建設をやることだ」(山本、前掲書三六〇頁)。そしてまた、四四年暮れ、徐州で病臥し一時重態におちいつて

ようやく回復したのち、彼は「俺が死んだら、どうするつもりだった」「もし俺が死んだら、死骸を日本の方でなく、延安の方へかついで行って貰ひ度いよ」と冗談ともつかず言った（同前、三六五頁）。

やがて歴史が日中間の戦争に最終的な決着をつけた時——敗戦の日を橘は「奉天」で迎えた。時局の見通しや今後の道を求めて集まってくる人々に対し、彼は中共軍の進出について、次のように語った。「中共軍は熱河、遼西、山東方面から必ず満州に進出する。そして満州を基礎として軍事的充実をはかり、やがて南下して関内に出撃して中国全土を制圧するであろう」（同前、三七四頁）。

橘が、この奉天の地で客死するのは、「八・一五」から僅か二カ月の後、十月二五日のことである。

## 九　むすびにかえて——アジア主義の彷徨と終焉——

いま、橘の生涯をその終焉の日まで辿ってきて、おそらく私たちの脳中に最も強く印象づけられることは、その思想、心情において、また行動において、橘が幾様かの容易に解きたい矛盾をかかえこんでいたという一事ではないだろうか。じつさい、彼の行動の軌跡を眺める時、そこには、その主観的意図と客観的状況とのあまりにも大きなへだたり、あるいはまた現状に対する鋭い認識とそこに打ち出される方策との異常な乖離といった問題性に誰しもが気づかされるにちがいない。こうした問題に対して歴史を飛びこえての批判、裁断は橘の場合において、むしろきびしく斥けられねばならないであろう。歴史の展開とは、様々の可能性が、それこそ一個人にとつては容易に逆睹しがたい諸状況のからまり合いの中で、結局のところ、ただ一つの現実性へと転化する過程に他ならないからである。

だが、それにしても、そうした行動のレベルとは別に、橘の思想は、なおその構造自体においてやはり何層か

の相対立するモメントを内在させてはいなかったであろうか。たとえばそこには、時々そのウェイト、アクセントを異にしながらも、たしかに東洋と同時に西洋的なものが相互に葛藤し合いつつ同居していた。あるいはまた農業世界と工業世界が同居しており、さらには、個人主義と超国家主義が同居していた。別の次元においていえば、日本と中国が同居していたという表現もまたむろん可能であるだろう。

橘は、東洋的価値を主張したけれども、それは西洋の生み出した諸原理を一方的に排斥するものでは決してなかった。むしろそれは「西洋、東洋ともに等しく人類に属し、その創造した文化は人類共通の宝物である」（『独裁政論』上『著作集』第二巻六〇五頁）こと、しかし同時に「物の道理は決して一つではなく、東洋のことは西洋の道理ばかりでは処理できないことがある」（『孫文綱領の東洋的性格』『著作集』第三巻一四四頁）という認識に裏づけられていた。あるいはまた、橘は重農主義者ではあったけれども、必ずしも農本主義者ではなかった。東洋世界において工業のもつ意味、すなわち「日本や印度及び中国の工業地帯」の果すべき役割を正当に認識し、かつ強調した（『汎亜細亜運動の新理論』（『満州評論』五巻三号、『著作集』第二巻五八九頁）。そしてまた、「上御一人」による改革を説きつつも、個人埋没的共同体主義とは最後まで無縁であった。むしろ自覚的個人のもつ重要な意味、「共同体的自我意識」の主張は、彼がゲマインシャフト的「東洋共同体論」を展開した時においても、決して手放さなかった重要なエレメントであった（『漢民族の性格と其文化』『満州評論』一九巻二一、二二号『著作集』第三巻一〇七―一二三頁）。橘が、日本と中国のはざまにあって、名状しがたい苦悩を味わったことは、むろんつけ加えるまでもないだろう。

だが、それにしても橘の中にこのような様々の矛盾を植えこんだものは、はたして何であったのか。あるいはまた、橘におけるそうした矛盾の内在は、いったい何に起因するのか。ある思想家がどのような思想内容を我

がものとし、かつそれを表出していくかは、むろん思想家個人に属する問題である。それこそが、その思想家の個性と特質を開示する。しかし、橘についてのこうした設問に対して、近代日本の中国認識という地点からの接近を試みてみることは、彼の思想の考察において、やはり重要な作業の一つであるにはちがいない。

私は、本稿のはじめに、橘は「近代日本において日中間を舞台に活躍した数多の群像の中での最終ランナーだった」といえるのではないかと書いた。それは、橘が、日本敗北のちようどその年、大陸で客死したという、いわばドラマティカルな客観的事実に由来している。しかし、いま、先述のような設問に接する時、私は、こうした規定をむしろその内実に即してもう少しく見きわめておくことの中に、ある種の手がかりが得られるのではないかという想いを抱かされる。橘は、どのような意味合いにおいて、最終ランナーであったか。それは、橘の歴史的位置づけにかかわると同時に、また彼のかかえこんだ様々の矛盾の性格の考察へとつながっていく種類の問いでもあるだろう。

ふり返ってみると、明治初頭から「八・一五」に至るまで、どれほど多くの人々が中国という巨大な対象を一つの基軸に、己れの思想形成をとげ、同時にまた近代日本自身の運命にかかわる諸課題について想いをめぐらしてきたことであろうか。ここで、中国を基軸とする思想形成とは、必ずしもいわゆる「中国派」と目されるような人々の場合だけを指すとは限らない。それは何よりも、近代ヨーロッパの進出の中で、いわば近代アジアの歴史を共有した日中両国の生き方について、それなりに深い思索を展開したすべての人々を広く包含している。こうした観点から眺める時、たとえば福沢諭吉もまた、いやむしろ福沢諭吉こそは、およそ近代日本における決定的な中国観形成の先頭ランナーであったといえるかも知れない。

あらためて述べるまでもなく、福沢の提示したいいわゆる「脱亜入欧」論、そしてまた「我れは心に於て亜細亜

東方の悪友を謝絶するものなり」という明白な態度決定は、広く近代日本の進路を規定したテーゼであり、同時にまた、それをどのように理解するにせよ、明らかに一個の文明史的予言であった。福沢のこのテーゼが、彼の生きた時代の「東方世界」「西方世界」を確固として見すえたうえでの明快な立論として、群を抜いた拡がりとして射程をもっていたことは、ほとんど多言を必要としないだろう。

だが、ここで福沢を先頭ランナー、橘を最終ランナーと呼ぶことは、あまりにも唐突にすぎるにちがいない。私もまた、単純にこの両者を一つの線で結び合せるというような意図は持っていない。むしろ歴史は相互に反撥し、また吸引し合うような無数の糸によって織り成される太い流れである。しかし、それにも拘らず、中国観ないし中国社会論という一点に限ってみれば、橘のそれは、同じくこの太い流れの中に属しつつ、しかも福沢のまさしく対極に位置していたように、私には思われる。福沢が、中国の官僚、士大夫階層を支配する儒教的精神構造の中にこの国の文明世界の特質を鮮かに剔出し、そこに本質的に内在する「旧套」「固陋」の精神に対して訣別の宣言を発したのは、明治の初頭のことであった。それからほぼ半世紀ののち、橘は、何よりも道教世界の中にこの国の民族思想を発見し、同時にまた、この国の民衆世界、民衆自治の中に中国社会の進歩をもたらす真の活力を期待する。儒教から道教へ、官僚から民衆へ、その視座のいわば一八〇度の移動は、あまりにも明らかである。橘は、民衆世界からする中国世界像を構築した。その中に中国を発見し、その中に中国の真の生命を見出そうとした。そしてそれこそは、近代日本の中国認識の中で、明治、大正の歴史の蓄積を通じて、橘が生み出した一つの決定的な成果ないし指標だったといっている。

もっとも、このように言うことによって、私は福沢の中国論が表面的、表層的であり、これに対して、橘のそれがより実体に即したアクチュアリティを備えていたということを述べようとしているのではない。両者はとも

に中国認識において、たしかに真実であった。あるいはまた、その歴史的時期に応じて、中国世界の真相を鋭く切りとっていた。明治の初頭、福沢が、一つの文明世界としての「中国世界」という、まさしく文明論的視角においてこの国をトータルに把握し、批判し、かつ拒絶した時、それはこれまでのわが国の中国認識のうえに立つて、この世界の在り方の特質を最も鋭くえぐり出したものだったといっている。だが、近代というダイナミックな世界は、両国を軍事、政治、経済、社会あらゆる側面において複雑に結びつける。一つの文明世界という形をとった中国の相貌だけではなく、そこに生きる民衆の世界が徐々に姿をあらわす。「脱亜入欧」という近代日本の現実の歩み、そこに生み出される「中国世界」のトータルな拒否に抗して、明治以降半世紀のプロセスのうえに、橘が民衆世界からする一個の中国社会論を構築したことは、様々の中国論が輩出した中で、この国の真相に深くせまるものとして高く評価されている。こうした中国認識の構築に当って、橘は福沢的な立場を一方的に排斥したのではなかった。すでにみてきたように、彼は福沢の批判した儒教的官僚世界を民衆の手によって根底的に変革することの中にこそ、近代における中国の生き方をみようとした。そのラショナルな認識方法において、あるいはまた民族意識の覚醒に対する正当な評価において、橘はむしろある意味での福沢の弟子であった。いわば橘は広義における福沢的認識の中から生まれつつ、同時に中国社会の中に深くもぐりこむことによって、より重層的、多層的な中国社会論を構築、提示したのである。彼は、「脱亜入欧」という要請を理解していた。だが、他方また、その中国体験と中国認識を基盤に、東洋零細農民がいかにして前近代の桎梏を脱しうるかという課題について、到底これを見捨てることはできなかった。あるいはまた、彼は、「商工業国家」への脱皮が歴史の進化の目盛りを刻みこむであろうことを正当に評価していた。しかし、中国の現実を前にして、数億を擁する農民国家が、この過程をいったいどのような形で歩みうるのかという難問は、彼の中に容易に抜き去ることのできない心のトゲ

として存在していた。おそらくそれは、近代日本において、その時代の歩みとともに次第に深く、かつ真摯に中国にかかわっていった人々の上におおいかぶさった共通の課題であったといえるのかも知れない。そして、実は、現実の構造そのものの中から生み出されるこうした課題の湧出、それへの直面こそが、橘の思想に何層もの複雑な矛盾の構造をもたらした歴史的原因ではなかったであろうか。

この矛盾の重圧を、一言で、橘は、アジア主義的原理の設定によって脱却しようとした。いやむしろ「九・一八」の衝撃の前に、一挙的な跳躍によってそれを解決しようとした。

現在の時点に立つてみれば、この跳躍が、歴史の筋道を取りちがえた無惨な失敗であったことは、あまりにも明らかである。それはついに依るべき支柱、現実的基盤を欠いたアジア主義的原理であり、また日中間にかけられようとした架空の橋であった。私たちは、一方では、たしかに橘の思想が、単に「東洋精神」さらには「日本精神」のみを声高に主張するアジア主義ではなかったことを承認することができる。少なくともそれは、東洋農民の顔を刻みこみ、くつきりとした輪郭と具体的内実を備えたアジア主義であった。しかし、他方、最後につけ加えねばならないが、それは何よりも現実的基盤の全き欠如という意味において、さまよえるアジア主義であった。あるいはまた、アジア主義の彷徨であった。近代日本のアジア主義は、その内実において、たぶん最もすぐれたものを橘の中に生み落しつつ、その時、ついに現実の定着点、支柱を見出しえぬままに、むなしく中国大陸のうえを彷徨していたのである。そしておそらくそれは、同時にまた、近代日本におけるアジア主義の歴史的終焉を意味するものでもあったにちがいない。明治の中葉以来、あたかもくさびの如く大陸に喰い入った日本と中国との関係の中で、中国を基軸に生み出されつづけたアジア主義は、橘をもって思想的に終焉する。そして、それとほぼ平行に、日本の敗北によって、近代の日中関係の構造もまた崩壊する。つけ加えれば、そうした事



態こそは、戦後日本における「方法としてのアジア」（竹内好）という仮説の提示を準備するものでもあったろう。「最終ランナー」としての橘の歴史的位置づけは、おそらくはこうした問題性の中にのみ存在する。

ふり返ってみれば、近代の日中関係は、その複雑な構造に応じて、その多様な局面に由来する様々の思想を生ま落してきた。橘のそれは、明らかにその一つの極に立っていた。しかし、歴史とは断絶と連続の契機とともに含みこむ異様な流れであり、また営為である。その意味では、ひとたびはカッコの中に入った近代（戦前）の日中関係は、やはりある側面において現代の日中関係をもその深い地底において規定しているにちがいない。私たちは、近・現代アジアの運命を、その初発の地点に立ち返りつつ、新たな視角から検討することが要求されているのではないだろうか。